

私の夢は夢を持った他の子をシバくことです。

しゃけむすび

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レースで活躍したウマ娘というのは好意的な目で見られることが多い。〈芦毛の怪物〉ことオグリキャップ然り、一時期〈ヒール〉の渾名をつけられていたライスシャワー然り、どんなおどろおどろしい二つ名がつけられようと終わってみれば引退を惜しむ声ばかり。それは単に彼女たちがレースに対し真摯であり、素晴らしい人格者であったからにならない。

ならば引退して尚、憧憬や羨望の目を向けられることなくただひたすらに恐れられるウマ娘がいたとして、その者は何を思い、何を成したのか。

別名を〈篡奪者〉。これは、後にファンの間で長いレースの歴史上最も凄惨な悪夢として語られる三年間の物語。

※純粋な悪役を書いてみたくなりました。最初はあんまり悪くないです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

目次

プロローグ	1
模擬	5
兆し	14
進化	18
確認	25
進路	28
幸運	33
初公式	38
問答	46
胎動	55
【幕間】あるウマ娘の想い	65
期待	72
異常性	79
失敗？	85

プロローグ

私はこの春16歳になるウマ娘である。名前は特に言う必要はない。

本来であれば花の高校デビューと行くべきところだが、私は中高一貫の学校に通っているので残念ながら通常の進級とそう変わらない。そんでまあ、突飛な話にはなるのだが、私はある障害を持っている。と言っても足がないだとか体が弱いだとかの身体的なものではない。寧ろ今まで怪我らしい怪我なんてした事はないぐらいには頑丈にできている。

では何だという話になるが、ぎっくり言ってしまうと私は本能の一部が欠落しているのだ。要は、ある種の感情欠落のようなもので、ウマ娘特有の走る事で得ることのできる快感だとか楽しさだとかを、私は一切感じ得ない。先天性の失感情症、というのが私が小さい時に医者に告げられた病名だ。と言っても軽度のもので、怒りもするし、楽しいと思うこともあるのだが。

ただ本当にレース、ひいては走る事に楽しさを見出せないというだけなのだ。しかし、それは家族や周りの者からすれば非常に深刻な問題であったようで、医者にそう診断された時、両親は泣くし、祖父母も泣いたし、親戚もちよつと泣いてた。猫は鳴いてた。

何故そこまで大々的に露見したのかといえば、それは母親による処が大大きい。何でも現役の頃に名のあるレースでいくつも一着を搔つ攫っていたらしく、そんなウマ娘の子供であれば、と私は随分将来を嘱望されていたらしい。私からすれば勝手に周りが言っただけなので知ったことでは無いが、問題は母親の方だ。母親は、今でこそだいぶ良くなったが、医者に行った日から目に見えて憔悴していった。何かしら顔をつつき合わせる度に、変な顔で見えてくるし、終いには「ちゃんと産んであげられなくてごめんね」等と抜かしやがった。その時ばかりは流石に腹が立ったものだ。自分が何とも思っていない事を憐れまれる事ほど悔しい事は無い。

この時、初めて親に腹を立てた私は、あろうことか泣き崩れていた

母親の胸ぐらを掴んで、お前よりも強いウマ娘になってやるから今に見ていると啖呵を切ってしまった。この日の事は数年経った今も尚、後悔している。

啖呵を切った手前、やらない訳にもいかず全く興味ないレースの為の練習を次の日から始めた。最初の頃は、元トレーナーだと言う親父が何かと指図してきたが、自分以上に自分を理解できる者はいないと信条を掲げていた私は何やら吠え立てる父を無視して1人山奥に突き進んでいった。とりあえずは朝起きてから日が沈むまで走り回って、もし疲れたらその都度休んで、を繰り返した。一度も疲れずに走り回れるようになればとりあえずは体力の心配は要らないだろうと、今思えば阿呆も此処に極まれりだが、当時はひたすら根性のみで動いていた。

しかし現実はその優しくなく。どんな凶猛な獣でも山の地形では全速力で動けないだろうと高を括っていたが、そんな甘い事はなく、ある日とうとう脇腹の辺りに少し深めに傷をつくってしまった。勿論、それを親が看過する訳もなく、這う這うの体で帰ってきた私を病院に運び込んだ後、父親は大層な剣幕で怒鳴りつけてきた。しかし一度やると決めた物を投げ出す事が何よりも嫌いだった私は、父を説得するのを試みた。そして、数分ぐらい話していると何を思ったのか父親はさめざめと泣き始めた。当時は何で泣いてるかなんぞ知る由も無く、慰め方が分からないのでただ見つめていた。やがて泣き止んだ父親は、しばしの逡巡をしていたが、最後はいくつかの制限を設け、山でのトレーニングを許可してくれた。何事もやってみるものだ。母親には、日頃の特訓も父親と行なっていると言いつ張っていた為、怪我についてもそれとなく誤魔化しておいた。

そんなこんなで数年経った今も、その山にちよくちよく足を運んでいる。未だに、ぶつ通しで走ることはできないが、獣も容易に撒けるようになったし日没まで1時間程度まで持続する様になったから特訓の成果は出ているようだ。

だが、無駄に体力があるだけでは、レースには勝てない。ならば、何かこう、私の必殺技を考えなければいけないと思いついたのは小三の

時だった。

しかし、ここで1つ問題ができた。私は前にも書いた通り本能が無いので、この走り方が嫌いだとか、苦手だとかそういうのが無かったのだ。それに加えて身体能力的にも均整が取れた体だったようで、どんな脚質の走り方でもある程度はこなせてしまうのだ。

このままでは器用貧乏になると日に日に焦りを募らせていたが、思わぬ発想が解決の糸口となった。

それはある日、親父に走り方の参考までに、と幾つかのレースのテープを借りて見ていた時だった。私は、ふとこんな事を思った。
(わざわざ自分の走り方を作る必要があるのか?)

ビデオの中ではウマ娘の中でも上位の上位である強豪達が鎬を削っていた。目の前で、自分よりも遥かに経験を積み、数多の戦場を勝ち上がってきたウマ娘がその努力の結晶を惜しげもなく披露している。私はどんな距離も、走法も不得意ではない。ならば、今画面の中にいるウマ娘の走り方を模倣できるんじゃないか?

試しに一つ、見ていたレースで一着を取ったウマ娘の走り方を再現してみる。試行すること数回、やがてしつくる走りができたのでビデオで自分の走りを確認する。

(完璧じゃないか。)

そう、完璧だったのだ。速度は絶対的に劣ってしまうから仕方ないとして、それ以外は一分の狂いもなく、フォームを再現できていた。

これを活かさない手は無い、極めれば間違いなく全国レベルと渡り合える。と確信した私は、次の日から寝る間も惜しんでフォーム研究に勤しんだ。

そしてある日、母親の知り合いの子供達とレースをすることになった。どうやらある年齢までいったらお披露目会の様な形で模擬レースをするのが通例としてあったようで、私の噂は広まっていたものの、母親が頑張ってくれたらしく私も参加できる運びとなった。

誰かと競えることなどそうそう無いので、この機会に自分の必殺技がどの程度通用するか試してみることにした。

結果は大成功。走ってる最中に隣の娘の走り方を真似してみれば

それが驚くほど体に馴染む。この技のあまりの強さにハイになった私はそのまま勢いに任せて一着をもぎ取ってきた。しかも成果はそれだけに留まらなかった。真似をされた娘が動揺してペースを乱していたのだ。その娘は結局、最後方に沈みそのまま最下位となった。状況に応じて対応できるだけでなく、対戦相手のペースも乱せるのだからこんなに強い武器はない。私はこの技の伸び代に内心小躍りしていた。

そして現在、トレセン学園所属のウマ娘となった私は兼ねてよりの計画を実行に移すことを決意した。

模擬

(うるせえなあ……)

秋の寒空というにはあまりに晴れやかなレース場の、ゴールのすぐ後ろでそんな事を思った。

ざわざわと混乱している生徒の声が聞こえる。すぐ近くで蹲ったウマ娘が何やら呻いているのが見えた。

なんか言った方がいかな

混迷冷めやらぬレース場で抱いた疑問はきつと、私が異常であることの何よりの証明なんだろう。

——始まりは、二ヶ月程前に遡る。

兼ねてよりの計画。それは、出来るだけ早めにG1に出場し、とつとと一着をぶんどる事である。というのも、今私は母親への義理立ての為にここまで来たと言っても過言ではないので、レースに対してマジでモチベーションが無いのだ。正直バイトとかして金を貯めたい。

高等部上がるタイミングで動き始めたのは、一般的にそっちの方がレベルの高い相手がいるからだ。有名な賞の方がきつと周りも納得するだろうという腹つもりだから、三冠と目される内のどれか一つを最終的には獲りたい。母親は確か3つほどG1で賞を取っていたので最低でも4つは獲らねばならない。

しかし、私のそんな計画は早々に頓挫しかけた。

「単刀直入で申し訳ないが、このままだと君は退学処分になってしまう。」

「わっつ」

呼び出されるがままに向かった生徒会室で、現生徒会長のシンボリルドルフさんは開口一番そんな事を仰った。あまりに突飛すぎたので変な声が出てしまった、怒られないだろうか。未だ理解が追いつい

ていないがいつまでも呆けてることはできない。性急に状況を整理せねばならないのだから。落ち着け、素数を考えて落ち着くんのだ。

(2. 4. 6. 8. 10...)

それは偶数だろうというツツコミはさておき。単刀直入と言っていたが単刀直入どころの騒ぎではない。まだ寛いでいる時にフラツと現れるGの方が可愛げがあるというものだ。学園では品行方正をモットーに、慎ましやかに生活してきた筈の私が何故そんな目に合わなければならぬのか。

そんな事を考えていると会長さんはハツとした様な顔でこう言った。

「い、いや、すまない。少し唐突すぎた。だけど、君が退学の危機にいるというのは事実なんだ。一先ず私の言うことを落ちついて聞いて欲しい。」

「はえ」

彼女が言うにはこうだ。まず、私は未だに模擬レースすら出しておらず

この学園に在籍する生徒として好ましくないと思われていること。次に、このままでは如何に普段の生活態度が良くても退学処分を下されてしまうこと。しかし、二ヶ月後にある今年度最初の模擬レースに出場するのを皮切りに、徐々に競走活動に参加していけば退学の話は無くなるだろうということ。

「本当に急な話だが、私もつい先日にもその事を聞かされてね。いきなり理事長が話すのでは君も驚いてしまうだろうということ。私が伝えることになったんだ。」

「ひえ」

私のような一般ウマ娘からすれば理事長と生徒会長に目に見えた違いは無いのだが、会長さんも下々を出来うる限り気遣ってくれたのだろう。

——肝心なのは走りさえすればどうやら退学は無いらしいということだ。……無自覚ながら、早くも惰性に負けていたらしい。しか

し、先述の通り、そろそろ動かねばなあと思案していたところではあったので、丁度良いと言えは丁度良いのだが。

「…私達にとってレースは生活の基盤と言っても過言では無いが、そういう訳では無い子がいるのも重々理解しているつもりだ。君の普段の行いは私もよく知っているんだ。正に清心誠実。君のような人格者がレースに出ないと言う理由だけで将来を左右される経歴に傷がつくのはあまりに心苦しい。」

「ふえ」

「……本格化さえしていなければまだ何とかなつたんだが、君は既にしてしまっているからね。このままというわけにもいかないんだ。だけでもし、何か心因的な理由で忌避しているのであれば心配無用、心置きなく言ってくれて構わないよ。その時は力になる。」

「へえ」

「……まさかそんな事は無いと思うが、どこまで相槌をふぎけたら怒られるか試してる訳ではないよね？」

「ほえ」

「よし、分かった。何も心配は要らなさそうだね。明日にでもどこかのチーム練習に参加させて貰えるよう打診しておこう。」

…ツチ。5回が限界か。優しそうだし7は堅いと思つたんだけどな。しかしまあ、何だかここまで下手に出られると逆に申し訳ないものがある。要はこの話は、走る為の学園で走る気のないバ鹿がいるというだけなのだから。そんなの怒られて当たり前である。

——事実を陳列するとあんまりにもあんまりなので、ここら辺でやめておこうと思う。

さて、二ヶ月か。猶予にしては長いし鍛えるには短いな、とも思つたが、除籍の条件と私と他のウマ娘との現状を鑑みてくれたのだろうかと思う。

おんぶにだつとも極まれれば恥はなくなるものだ。つまり、私の頬が林檎のように赤くなっているのと今の話は何ら関係のないものである。

——そして二ヶ月後、とあるレース場。

時の流れというのは早いもので、走り方だのなんだのを復習して、もはや日課となったフォーム研究をしているうちに本番の日が来てしまった。

しかも何の因果か秋だというのに曇り一つない晴れ。本番といつても所詮は模擬レースなので特に進退がかかっている訳でも無いし、考えてみれば二ヶ月という短期間での出走を令されたのも、私が特に順位にこだわらないだろうから怪我の危険性が低いと思っただけに違いないし、実際その判断は間違っていない——とも限らない。ここで私が高他のをぶつちぎって一着を取れば、きつとその後の選手生命に良い影響を及ぼせるのだ。

だがしかし、辺りを見やればそんな暢気な事を考えているのは私だけだと分かる。どいつもこいつも今にも飛びかかって来そうなほどギラついた目をしている。

察するに、こいつらは今回のレースで何か結果を残さないといけなின்றろうな。なら最悪一着は譲ってやるのも吝かではない。私は心優しいウマ娘だからな。わははは「おい。」はは、

「……んん？」

左の、少し柄の悪そうな目つきベリーのシヨートの髪の奴が声をかけてきた。

「お前みたいなのがなんでここにいんだ？」

その言葉を皮切りに、ベリーシヨートは熱弁を始めた。要約すると大体以下の通りである。

「ここは本気でレースに勝ちたいって思ってるヤツだけが立てる神聖な場所なんだ。ハッキリ言って邪魔なんだよ、お前みたいな半端者は。目え見りや分かるんだよ、お前私達に勝つ気ないだろ？」

∴私は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の正論パンチウマ娘を除かねばならぬと決意した。

どんなに自分が悪くたってそんな口調で言われれば腹の一つも立つというもの。というか私は熱意を持ってないのに特に知りもしない

で偉そうな口を聞かれたのはムツとした。何よりこいつは

「勝つてから言えよな、そういうのはさ。」

「あア?」

顔がムカつく。

「もういい?そろそろ始まるぜ?」

「なっ!?!おい!」

こいつの言葉を借りるとするなら、神聖な闘争の場面において猫を被るのはナンセンスだろう。ならこの際、無駄なことはしない。何よりさっきの熱弁ですっかり私はやる気になった。正論を言われた事に腹が立った訳でも、その生意気な口調にムカついた訳でも無い。

改めて、何やら吠えているベリーショットを見やる。体操着の上からでも分かる、太腿の辺り筋肉のつけすぎだ。これではパワーは上がるだろうが肝心のスピードは出ない。そしてやや右に偏った重心は、適切な体幹トレーニングができてない証拠だ。これでは最も適当なフォームが維持出来ないだろう。加えて浅くはあるが隈があり、顔色はこの天気で若干蒼白だ。こいつはこの程度、このレベルの仕上がりで私に啖呵を切ってきたのだ。私はそれが何よりも腹立たしかった。私はレースに興味はないが、舐められるのが好きな訳では無いし、寧ろそういのは我慢できない気性だ。それこそ自認するレベルで。最低でもこいつは必ず負かさねばならないと決意した。

指定された時刻通りにレースは始まるというので、予め抽選されていたラインに出る。特に意識する事は無い。後は始まるのを待つだけだ。

そして、

『よーい…始め!』

教員の号令とともにレースは始まった。

(逃げは2人、先行が3人、差しは2人、追い込みは無し、と。)

事前情報が一つも無いので、より具に観察をしなければならぬ。本来ならなあなあに済ませる予定だったが、止めだ。殺す。

：概ねよくある展開だろう。逃げに關しては1人がかかり気味なので、冷静に隙を突ければ、落とすに難くない。先行はとりあえず自

分も含めて4人だが、見たところそこまで凶抜けた奴はいない。

終盤の動きを見てからの対応で間に合うだろう。

そして差し、さっきのベリーショートは差しらしい。成程、だからパワーをつけていたのか。

しかし前述の通り決して好調とは言えないコンディションに加え、逃げが2人居ると言うのを加味すれば、さして気に留める必要はない。

残りの1人は…

(シ、あいつのフォームはいいなあ。踏み込みに独特の緩急があるのか。粗いと言えば粗いが、この中では際立ってるな…溜めた脚を使う時に振りも少し大きくするかな。加速力のことをよく考えてやがる)

よし、決めた。今のところ1番の注意人物はあいつだしフォームも悪くない。一先ずはあいつのを真似て潰そう。

緩急。あいつは2歩毎に切り替える。なら2歩半にしよう。あとは、少し掌は大きく開いて、やや前傾姿勢。…よし、こんな感じか。中々どうして良いフォームだ。きつとこれを物にするのは並大抵の努力じゃ済まなかったのだろう。

後ろを少し振り返る。

「わっ…ええ、ええ？」

ぐへへ、良い感じに動揺してるみたいだ。これなら100mも走れば潰れるだろう。他に脅威は無いし、後はこのまま行って最終直線でぶつちぎりだな。

残り200m…来た100m、ここで一気に加速する。3歩目の最高速に達したら、この前ビデオで見た走法で加速する。フォーム自体は良かったが、ば数を踏んでないせいか彼女のでは末脚を活かしきれない。改善にはどうしても研究が必要になるだろう。

(ふむ…)

良いフォームを魅せてくれた礼はせねばならない。今し方、彼女のフォームでは末脚を活かしきれないと言ったが、それは経験に劣る本人の話で、基礎を重点的に鍛えた私は、その限りではない。

当然、後でこのレースを見返すだろうし、その時の一助になってやろう。余計なお世話の老婆心だが、それでもまあこんなクソ下らない行事に少しは華を添えてくれたのだ。感謝はしている。

「……………ふッ、」

予想通りだ。先程までの弄ったフォームを切り替え、未完成の彼女に合わせて、再現し、呼吸のタイミングとつま先の出し方を少しだけ意識するようにした。

…50m…10m

『ピッ！』

私は一着だった。二着とは2バ身程度。まあ完勝と言って差し支えないだろう。驚くほどに何とも思わない。

…しかし、本当に何が楽しいんだこれ。そもそもただ走るだけなのにどこに楽しみを見出せば良いんだ？

(わっかんないなあ)

そんな事を考えていると何やら呻き声が聞こえた。

よくよく思い返してみれば、レースが終わった後の事は深く考えたことがなかった気がする。あの娘はどんな顔をしているだろう。

「な、……………えっ……………なんで」

理解が追いついてないといった様子の彼女は、そんな事を呟いていた。

無理もない、自分が磨き上げてきた筈の自分だけの技術を、少し見ただけの私に完璧に模倣されたのだ。風邪ひいた時に見る悪夢の方がまだ現実味があるだろう。

(うつへえ、ネバギバあ)

さらに辺りを見渡せば、今し方レースを終えた者の中で最も注目を集めているのは私だと確信できる程度に人目を集めていた。と言っても、そこまで人がいる訳ではないが、それでも分かるほどに周囲は動揺し、騒めいている。

その状況については、驚いたというのが正直な感想だ。いくらこの学校がレースに重きを置いていると言っても、言い方は悪くなるが大した実力がある訳でもない一般の生徒に私のした事が分かるなどと

思っていないなかったのだ。それについては些か認識を改めなければならぬだろう。彼女らもまた、全国から夢を追いかけてここまで辿り着いた強者という事だ。

ついでに言えば、恐らくは私が模倣した差しの娘を見にきたのである。ろうトレーナーらしき人間も数人いたが、そいつらもまた激しく動揺していた。それについては大して驚きはしない。ウマ娘を戦士とするなら、トレーナーは軍師だ。フォームだなんだという領分は彼らの方が余程詳しいからな。

しかし困った。私の戦法は、自分で言うのもなんだが今までに前例がないくらいには特異だ。対処のしようがあるとも思えないが、これを機に私の噂は広まるだろう。闘争に於いて情報は何よりも強かな武器になる。万が一にも対策を立てられた時の為は今のうちから何か策を練っておいた方が賢明だろう。

…だがそれよりも今は、私の目の前で茫然自失としている娘に関心を惹かれていた。何故だろう、この娘を見ていると妙に胸がざわざわする。

先程とは打って変わって、何だか鳥肌の立つような感覚に私は支配されていた。

そのざわつきは私にとって未知であり、自分の周りで未知があるのはあまり好ましくない。ついでに、先のフォームについても議論がしたい。如何に未完と言えど天然物にしてはとても良いフォームだった。

「改善点とか分かった？何だったらもつかい見る？」

すると、その娘は突然の問いに多少面食らっていたようだが、やがて唇をワナワナと震わせて然る後、とうとう泣き出してしまった。そして何を思ったのか、その泣き顔のままどこかに駆けていった。

「ん？ん？…ああ、そうかあ。」

暫しの逡巡の後、気づいたことがある。彼女が顔色を明滅させていたのは十中八九私のせいであり、あろう事か模倣をした張本人に彼女は氣遣われてしまったのだ。プライドがズタズタどころの話ではないだろう。もはや立ち直れるかも怪しい。私は僅か数秒の間に、どう

やら取り返しのつかない大ポカをやらかしてしまったようだ。

だと言うのに、1人のウマ娘の未来を潰してしまったかもしれないというのに、私は何故かいつもよりも晴れやかな気分だった。寧ろ、あの泣き顔が頭にこびりついて離れない。あの顔を思い出す度に胸が躍る。いつそ今から長距離を走れと言われたら喜んで駆け出してしまうかもしれない。

今日は驚くことばかりだ。自分にこんな一面があつたなんて思わなかつた。

ただ、不思議と悪い気はしない。脳裏には、眉を八の字にする気力もなく歪に曲げ、汗と微かな砂埃に塗れた涙を頬に滴らせながら、横っ面を張られて怯えて泣く子供のように唇を噛んで嗚咽を殺す彼女の表情が想起されていた。

しかも、考えれば考えるほど落ち着くどころか興奮してくる。こんなもの、こんな気持ちを知ってしまったら手放せる訳ないじゃないか。

(よし、決めた。)

これからは、彼女たちの泣き顔を見る為に走ろう。勿論、元々の目標であるG14勝は大前提として、私の個人的な趣味としてそれらを楽しもう。

今までレースの事を考えるだけで毎日げんなりしていたが、今はそれが嘘のように昂っている。レースに夢を見たウマ娘は、それが叶わぬと知った時どんな顔をするのだろうか。何を見て、何を思うのだろうか。

想像するだけで、やる気がムンムン湧いてくる。何かやりがいを見出すだけでこんなにも世界が変わるのか。明日からの練習が楽しみだ。

兆し

あの模擬レースから早数日、変わったことと言えば練習内容にフォーム研究の時間が増えたことだ。昔取った杵柄というか、スタミナは既に有り余るほどに備わっている。技術を磨く事に専念する事にした。技術面の一応の目標として、歴代最強に名を連ねるウマ娘の走りを模倣したいのだ。

しかし、現実というのは儘ならないもので、私の戦力強化はすぐに行き詰まってしまった。というのも、あまり誇れる事でも無いのだが、私は幼少の頃から逆境だとか敗北だとかと無縁の人生を送ってきた。その為、悔しさだなんだというのはイマイチ分からない。

山で怪我をした後も翌日にはこつそりトレーニングをしたし、根性が無い訳では無いと思うのだが…。

そもそも私は、今までレースに出た数が少ないということもあり、自分より速いウマ娘と戦った事がないのだ。成長という概念を語るならば、敗北は必ずついて回るものだが、私にはそれが無かった。つまりは可及的速やかに、強者と対戦し、出来れば全力を尽くした上で敗北しなければならぬ訳だ。

そしてもう一つ大きな課題がある。それは、自らの身体能力と技術目標である古豪ウマ娘の身体能力の齟齬だ。

先の戦いで模倣した走りは、ちよつと綺麗だなという程度だったが、レジェンド級のウマ娘は文字通りレベルが違う。

他には類を見ない天性のフィジカルがあるからこそ、彼女達は各々の武器を絶対不可侵に昇華させてきた。フィジカルと一口に言ってもその実、様々な分野に分かれている。

例えば、〈神〉と謳われた初代生徒会長は〈鈍の切れ味〉と讃えられる程の末脚を持っていた。讃えられる程に、下半身が他の追隨を許さないくらい恵まれていたのだ。勿論他の要因もあるが、加速の元である瞬発力を生み出す速筋が異常な程に発達していたのだと思う。だからこそ後世に語り継がれる程の末脚が生まれたのだろう。

対して私は、他に比べれば遥かに恵まれた身体能力を持っているも

の、初代生徒会長と比べるのなんて烏澁がましい程度だ。これでは、完全再現は到底不可能。末脚の加速の度合いが絶対的に劣っている。

(まあ、悩んでも仕方ないかあ。)

今考え分らないのであれば無理に答えを出す必要も無いだろう。とりあえず出来ることから始めてみるべきだと思い直したのだが、ここでもまた問題が発生した。

知り合いと呼べる人間が、いないのだ。

やってしまった。考えてなかった。クラスメイトの名前すら覚えている自信が無いのに、どうやって強いウマ娘に併走を申し込むというのか。私が仮所属として練習に時々参加しているチームに頼ることも考えたが、弱小もいとこの彼らがそんなツテを持っているとも思えない。

かといってチームに所属している娘たちでは何回走ったところで負けようがない。

(かくなる上は…)

数分思案した後、余りの八方塞がり具合により、半ば自棄になった私はとある場所へ歩を進めた。

「そういう事なら喜んで協力させて貰おう。」

絶対に門前払いをされるだろうと覚悟して向かった生徒会室で、シンボリルドルフはこともなげにそう言った。まず入れてすら貰えないだろうと思ったのに何故かすんなりと通されたので、先の思索をオブラートに包みに包んで慎重に話し、そういう訳だから誰か名のあるウマ娘を紹介してくれないか、と聞いた結果が上記の通りである。

「私は以前君の力になると言っていたからね。それに個人的にも1人のウマ娘がレースに興味を示してくれているのは嬉しいんだ。」

成程、聞けば聞くほど聖人君子である。通常のウマ娘がこなす課題や生徒会長としての業務もあるだろうに。しかし、何事も頼んでみるものだ。この学園の教職員を除くトップなだからさぞ、やりごたえのあるウマ娘を紹介してくれるだろう。

「ただ、申し訳無いんだが今すぐにといい訳にはいかないんだ。…そ

うだな、今週の土曜なら久しぶりにオフの予定だから、その日でも構わないかい？」

んく…流石に業務やら何やらに忙殺されている輩にわざわざ休日割いてもらいたくは無い。それに紹介してくれば結構だからそう時間は取らせないだろうと思いいその旨を会長に伝えると、

「うん？」

会長さんは一瞬呆けた顔をした後、すぐに何か気がついたらしくこう言った。

「いや、紹介はしないぞ？君は私と併走するんだ。」

衝撃の事実に硬直している間に会長は続けた。

「少し噂になっていてね。何でも最近、人の走りを盗んでしまうウマ娘が現れたらしい。彼女の走りを見た者たちが言うには、フォームから足運び、更には仕草まで完璧に模倣していたそうだ。しかも普通なら他人に気を回す余裕なんてある筈もないレース中に、オリジナルの子よりも隙が少なくなる様に手心まで加えていたんだとか。」

…やってしまった。年頃の生娘の情報伝達能力を舐めていた。

「君の為とか、温情とかではなく、私は噂を聞いた時から、そのウマ娘と手合わせしてみたいと思ってたんだ。何せ相手の走りを盗むなんて、聞いた事がないからね。そこに件のウマ娘が現れて願っても無い相談をしてくれた。その好機を逃す手は無いだろう？」

合点がいった。私はどうやら虎穴に入り込んでしまっていたらしい。どうりで嫌にすんなり相談に乗ってくれた訳だ。さっきレースに興味がどうの言っていたのは何だったんだ。

「まだレースに参加し始めたばかりのウマ娘と戦ってみたいなんて、自分でもどうかしてると思うよ。でも、そんな事すら気にならない程に、未知の走りをするウマ娘に興味があるんだ。分かってくれとは言わないが、君は相談をして、私はそれを引き受けた。理由としては充分だろう？」

柵からぼた餅とはこういうのを言うんだらうか。しかしこの会長のアグレッシブさにはつくづく肝を抜かれる。

(もうちよつと易しくてもよかったんだけどなあ。)

私の初併走はいきなりラスボスとの一対一に様変わりしてしまっ
たようだ。喜ぶべきか否かは神のみぞ知る。

進化

会長さんとの約束が取り付けられた後、私は部屋に戻るとすぐに彼女の走りが記録されているテープを再生した。

以前も伝説級のウマ娘という事で、何かにつけて見ていたのでよく分かる。今の私では彼女に届き得ない。少なくとも本気のレースならば手も足も出ずに敗北する。

トレセン学園現生徒会長シンボリルドルフ。史上初の無敗の三冠馬であり、G1七勝を成し遂げた文字通りの生ける伝説。当時、外国生まれのウマ娘が数多く活躍していたレース界において、独力で世界と渡り合った傑物。その数々の偉業と本人の人格から、いつしか永遠なる皇帝の二つ名がついた。名実ともに今の日本を代表するウマ娘である。

彼女への総評は一言で言えば〈完璧〉だ。スタートからコーナリング、果ては直線での駆け引き等ウマ娘としてレースに必要な技術を全て彼女は高水準で身に付けている。どれか一つでもあれば十分に重賞を狙えるであろうレベルの理不尽ともとれる技術の集合体。心体が全て完全と言っていい程に研ぎ澄まされている。その中でも特に目を引くのはその精神力。もはや理外と言って差し支えないであろうそれは、私にとって目下の問題となっていた。

〈領域〉ねえ…)

真偽の程は定かでは無いが数百人、或いは数千人に1人の才能を持ったウマ娘はレースの最中、ごく稀に極限の集中状態になる事で限界以上の力を引き出す事が出来るというのだ。

そして会長さんはその領域に偶発的にはなく己の意思で踏み込む事が出来るらしい。

思案すればするほど彼我の戦力差が露わになるが、今回の併走で重要なのはそこではない。

今回の併走、不利である事は確かだが、端から負ける気など毛頭無い。何故なら彼女の戦った中に私の様な事ができるウマ娘はいな

かったと他ならぬ会長本人が言っていた。それは即ち、彼女ですらもし模倣されればどうなるか分からないという事に他ならない。よしんば負けたとして、この絶好の機会に無為の敗北などあつてはならない。

戦意は充分、ここ最近のコンディションも悪くは無い。これならば皇帝の喉笛に手が届くかもしれない。そんな思いの中、思考の限界を迎えた私は眠りについた。

そして数日後、私は学園内のあまり人気の無い寂れたグラウンドに来ていた。会長さんはせっかちなのか既に来ていて、すぐ側に眼鏡を掛けた妙齢の女性が立っていた。恐らくストップウォッチを持っているので彼女のトレーナーか何かだろう。何やら談笑している様子だ。

「・・・お、あの子が件の?」

眼鏡はこちらに気づいたらしく会長さんに何やら語りかけた。すると、会長さんはこちらに振り向いて言った。

「おお!よく来たね、この学園は広いからもしかして迷子になってるんじゃないかと不安になっていたんだよ。無事に来れたようで何よりだ。」

彼女は私の事を何だと思っているんだろう。流石に舐めすぎじゃないだろうか。在籍している学校の敷地内で迷子になるなんて事があるのか?そう思ったのでそれとなく聞いてみた。

「ああ、いや滅多にそういう事は無いんだが、まあ:何事も例外はあるものでね、それと知らずに君ももしかしたら、と思ったんだ。気を悪くしてしまったのなら謝るよ。」

この学園はトリッキーな生徒が多いらしい。話している時の彼女はどこか疲れた顔をしていた。

「それよりも今日はこの後、数本様子を見ながら併走をする事になっているからね、期待しているんだ。君がどんな走りを見せてくれるのか。色々と準備もあるだろうから開始は30分後でいいかい?」

何かこだわりを持ってレース前にルーティンをする娘も中にはい

るが、私は特段何かそういうこだわりは無いので10分も貰えれば十分だと伝えた。

「分かった。君が良いなら開始は10分後にしよう。」

どうやら会長さんもその口だったらしく、併走の事前準備は速やかに行われた。

「距離は2000m、昨日は快晴であったから芝の状態も気にしなくて良い。それじゃ、準備はいいかい?」

・・・駄目だ。さつきから薄々勘づいてはいたが、会長さんはどこか私を下に見ている節がある。実力差があるのは分かっているのに特に何も思わないが、このままだと本気を出してくれないかもしれない。そうなったら困るので、一つ発破を掛けてみる事にした。

「会長さん。」

「ム、何かあったかい?」

「あなたの走りい潰しちまっても、恨まんで下さいよ?」

そう言うとう会長さんは呆気にとられたような顔をしたすぐ後、朗らかに笑ってこう言った。

「意気軒昂、戦意は充分のようだね。だけど、安心して構わないよ。」

そう言うとう会長さんはこちらを見据えて続けた。

「たかだか猿真似如きでは、決して辿り着けない皇帝の真髄、ご覧に入れよう。」

(ム、こりやあまた……とんだ食わせもんだな)

刹那、会長さんの後ろに雷を幻視した。冷や汗が吹き出るのを感じる。ただの立ち姿でこの威様、改めて彼女の皇帝の由縁を実感する。言葉で伝え聞くよりも余程分かりやすい。

そして、先の発言とこの気迫、この併走は間違いなく彼女の本気を見れるだろうと確信した。

「それじゃあ、準備はいいかい。私が号令を掛けるのをスタートとするよ」

眼鏡がそう言うので大人しくその時を待つ。

もはや言葉は不要。彼女の一拳手一投足、全て目に焼き付けてや

る。

『よーい・・・始めー!』

出だしは意外にも緩やかだったが、私は今までの中でも上位にくる好スタートを切った。にも関わらず、私の数歩前に会長は飛び出していた。そこから辺は流石に潜った修羅場の数が違うから仕方ない。

(序盤に模倣を見せて、反応を確かめる。動じなかったら半歩後ろについて差し足を溜めつつ後半に備える。もし他の動きをするなら臨機応変に。)

最初からフォームを模倣しては身体能力の差で彼女に追いつけない。逃げの状態で加速して2バ身程度離れたら模倣を見せる。今日までにさんざんぎテープを再生したんだからフォームの模倣だけならばもはや造作も無い。

(・・・しかし速すぎないか?)

中距離においては序盤の優位などあつてないような物。それを会長が分かっている訳がない。それなのにこのハイペース。しかし、会長の顔を見やれば涼しい顔で走っている。

(まさか・・・)

成程、合点がいった。いや、あまり考えたくはないが、一見すれば掛かっているとも思えるこのペースは、こいつからすれば何の事は無い。走っているだけだ。ただ、普通に、最も自分の走りやすいペースを。基礎一つとってもここまでの違いか。

悪くない。寧ろ良い。なればこそ、攻略のしがいがあるというものだ。私が怯み、遙か上の玉座にて私を見下ろす皇帝さんは、自分の努力の粋を模倣され、あまつさえそれに敗ればどんな顔をするのか。

(見てみたい、聞いてみたい、感じてみたい!!?)

いつかの情動が再び心に湧き出てくる。それと同時に是が非でも勝とうというやる気が溢れ出る。まさか自分が、斯様な悪意一つでここまで勝ちにこだわるとは思わなんだ。しかし、それが全く悪い気分ではない。功德を積んでいるような気分になつてしまふ。己が悦楽に入る事の、何と安らかなことか。

会長さんは、そんな私の心など素知らぬ風に、その豪脚で心を折らんばかりに駆けている。言葉だけ聞けば荒々しい想像にしかならないが、その実、その姿は一枚の絵画にしても何ら可笑しくない程洗練されている。

駄目だ、ウズウズして仕方がない。一刻も速く模倣された反応をみたい。こうなっては仕方が無い。以前ビデオで見た破滅逃げを模倣し、一気に先頭を奪いにいく。破滅と付くだけあって、随分とスタミナを消耗するが、会長さんを模倣するだけの脚は十分残っている。(ストライドは大きく。さほど前傾では無いが、尚且つ体幹を意識する。)

彼女のフォームの特徴として、癖が少ない事が挙げられる。私ほどの広範囲では無いにしても自在型の会長さんは走り方まで理想系に近い。

気付けば中盤に差し掛かっていた。芝生を蹴る音が嫌に耳につく。ここまで神経を尖らせた事もそう無いぞ。

(どうだ?)

期待半分、警戒半分で後ろを一瞬見やる。

『……………ドン』

瞬間、爆撃でもされたかという振動が脚を通して全身に伝わり、何かを挟り飛ばしたかのような鈍い音が私の鼓膜を震わせた。そしてそれが、会長さんの踏み込みにより発生したものだど理解するのに、数秒の時間を要した。少なからず疲弊し、体力の消耗により汗が噴き出している状況下でも、ハッキリと冷や汗が滲むのが分かった。

後ろを振り返る必要は無い。そこにいる訳が無いのだから。

(くそが……………与太話じゃねえんかよ……………)

言葉で知らされなくても本能で理解できる。これが、これこそが領域。精神性の極地にして、遙かな天稟を持つ者のみが到達する高み。気付けば会長さんは前方10m先にいた。半身の差であってものっぴきならない実力差の証明だというのに、これでは大敗どころではない。しかし、切迫した状態にあって頭は酷く冷静に思考していた。

このままでは敗北は必至だが、領域の存在を確かめられただけでも意味はある。しかし、しかし何か引つかかる。何か物足りない。

(…「猿真似では辿り着けない…」か。)

これだ。何か引つかかる。何だ？何がそんなに重大なんだ？

(待てよ……)

模倣以外なら……越えられるのか？

(…そういう事か。)

うっかり失念していた。模倣の強力さの余りに視野狭窄に陥っていた。

思わず数瞬前の自分を自嘲してしまう。元々、模倣は必殺技が欲しいと思ったから作っただけだ。なのにも関わらず私は、あたかも模倣以外で勝ち得ないかのように思考していた。模倣が駄目なら作ればいいじゃ無いか、新しい必殺技を。彼女に届き得る武器を。

(模倣の先……)

気付けば併走も終盤に突入していた。模倣……真似したら次は何をする？元々何の為に真似はあるんだ？人の後を追うだけの行動の意味は？

(…ッ！)

閃くのと同時に身体にそれらの動作を強いる。来た、来た来た来た来た！これだ！

(〈造り出す〉んだ。状況に応じたフォームを。指先の、掌の、太腿や脛脛の最適な形を！)

今まで幾千に登るフォームを模倣してきた。その中で選りすぐるんだ。状況に応じた体の各部位一つ一つの動き。そして造り出す。その瞬間に最も最適なフォームを。

真似をしたなら次は派生だ。後を追い、追いかけて続けたその背中に新しい形を見出す。

脚が母指球の辺りまで埋まるのが分かるほど強く踏み込む。そうすれば、今までの物のどれよりも優れた加速ができた。

残りは100m。会長との差は40m前後。……行けるか？いや、行くんだ。今、これを試さなくてどうする！

徐々に加速をする。ほんの少しずつ距離は縮まってきた。

(35m:30m:来た、25m)

ここで更に加速する。差しウマの末脚と、逃げウマのスタミナ回復を併せたフォームを造り、脚を奮い続ける。

(20:10:5)

(届く！)

そう思った瞬間、左脚がガクンと下がった。

「あえ？」

そしてそのまま距離は再び広まり・・・

『ピッ！』

私の初併走は、会長に5バ身という大差をつけられて終了した。

確認

あれから最初に言われた通り数本併走を行ったが、終ぞ、会長さんより先にゴールラインを踏む事はなかった。と言つてもあれからは勝敗これこれよりも、シンプルな対戦形式の経験を積みたくなつたのでそれに付き合つてもらう形になった。そして、眼鏡がそろそろ切り上げようと言ひ出したので、今日はここら辺で終わろうという事になった。

私は、主観以外の意見も聞いておきたかったので、会長さんに私の走りを批評して欲しいと頼んだ。

「ふむ、そうだね。ならこの後時間はあるかい？君は多分、ただ指導されるよりも、互いに意見を交えながらの方が思考しやすいだろう？少し議論形式で話してみよう。」

了承の旨を伝えると、幾分かグラウンドの片付けをした後、小さなミーティングルームの様な部屋に案内された。

「まずはお礼と謝罪をさせて欲しい。今日の併走は私にとって非常に有意義な物だったよ。そして先刻、君の技術を猿真似と揶揄した事を謝らせて欲しい。君の模倣は、予想の遥か上に行く素晴らしい物だったよ。」

最初の一本以外大した事はしてないし、最初に仕掛けたのは私だから世辞を言われずとも大丈夫だと伝えた。

「まさか、お世辞なんてとんでもないよ。君は気付いて無いのかもしれないが、数を重ねる度に君の走りは格段に成長していつてる。技術とかではなく、勝負勘とかの意味合いでね。最後の方なんて数年レースに参加している娘と遜色無いレベルだったよ。断言してもいい、君程のレースの才能の持ち主はそう居ない。」

何故、前にいたのにそんな事が分かるのか全く分からないがこんな場面で嘘をつく事も無いだろうから、ただ漠然と皇帝たる器量の深さを感じた。

そんな事より本題に入らねばならん。一本目の走りを私は追究しなければならぬ。

「そうだね、君は2つほど技を披露してくれたから、順番にいこう。1つ目は模倣だね。アレについては驚くというよりも、恐ろしいと思っただのが正直な感想だよ。」

何故そう思った？そしてそう思ったのなら何故動じなかったのか。という主旨の疑問を呈した。

「何故ってそんなの決まっているだろう。何処か見覚えのある走り方で前に出てきたと思ったら、目の前に自分がもう1人現れたんだ。一瞬夢かとすら思ったよ。なのにそれは、夢なんかではなく自分と同じく走っているウマ娘だと言うんだからね、恐ろしくも思うさ。まだ安っぽいB級ホラーの方が信憑性があるよ。」

成程、以前の娘には聞きそびれたが、真似されるとこんな感じに思うのか。皇帝様でこれならあの娘はどんな風に思ったのか、あの時とっ捕まえて問い詰めれば良かった。

「それにまあ、動じなかったというよりはアレで更に集中できたんだよ。」

「そりやあまた……なんで？」

「嫌らしいことに、君は注視しなければ分からない範囲でオリジナルを改変するだろう？大抵の子は君に模倣をされると、無意識にそれを目で追って自分のペースを崩してしまうけど、私のフォームは自分で言うのもなんだが、改変の余地が無い程度には完成しているからね。」

「……ん。ん、成程なあ。」

「君のそれは、もはや姿写しのレベルで私のものと合致していたんだ。だから私は、それを目で追う事で自分の走りに没入し、通常よりも深く集中力を高められたんだ。」

模倣が領域の引き鉄になった訳だ。これまた、思わぬ弱点というのを見つけた。しかしそんな芸当が出来るのなんざ会長入れたって、この学園に片手で足りるくらいしか居ないだろに。

化け物め、と内心で悪態をついた。

「2つ目については、発展途上とだけ言っておこうか。あんな事を出来てしまうのには些か舌を巻いたが、まだ無茶苦茶だ。現にあの時、複合せたは良いが、上手く噛み合って無い箇所があったせいで思う

ようにスタミナが続かなかっただろう？そこら辺を危うげなくこなせれば更に強力になると思うよ。しかし、不思議だ。君の技術はまだまだ改良の余地がある様にも思えるが、アレ以上は無いとも思う。全く、末恐ろしいな君は。」

「なんか…あざます。」

やっぱりいい人である。なんだかんだ褒められるのは悪いもんじゃない。

「しかし、安心したよ。今日のような走りができるのならメイクデビューも危うげは無さそうだからね。君が早く重賞の舞台上がってくるのを楽しみに待っているよ。」

そんな事を1時間程度話したら、今日はもうお開きでいいだろうという事になった。だが最後、会長はこんな事を言った。

「新しい技の目処が立ったとはいえくれぐれも油断しない方がいい。君の上下の世代には、一癖も二癖もあるような娘がたくさんいるからね。この先、重賞を狙うなら必然的に彼女らとかち合う事になるだろう。立場上どちらの味方にもつく気は無いが、これだけは伝えておくよ。」

成程、最後まで聖人君子である。ありがたいお言葉だが、今は何も考えられないくらい今日はもう疲れてしまった。眠気もひどいから反省はまた明日にしておこう。

そんな事を考えながら、少し遠い寮までの帰路についた。

進路

併走の約束を果たした後、メイクデビューに出る為に私は仮で所属していたチームに正式に加入した。ゆくゆくは専属のトレーナーをとつ捕まえてとつとと離脱する腹つもりだが、まだ一度しかレースに出たことのないウマ娘をスカウトしようなんて物好きがいる訳もなく、大人しく日の目を浴びるその日まで待つ事にした。

因みにチームメイトは先輩が5人、同輩は2人である。先輩に1人G2の賞を狙っている人がいるが、他は特に強くない。

一度も喋った事が無いので何か因縁をつけられる謂れは無いのだが、どこか敬遠されている気がしなくも無い。まあ、出られさえすれば良いのでこのチームに興味は無い。

こんな悠長な事を考えているが、既にメイクデビューは来週までに迫っていた。前回の模擬レースはともかく、今回は是が非でも勝たなければならぬ。このレースで一着を取らなければ未勝利戦に出場しなければいけない。そうなるのは非常に面倒くさいのだ。

幸いな事に、対戦相手のデータは既に手中にある。今回のメイクデビュー、特に警戒すべき相手はいないが万が一の可能性もあつてはならないので念には念を入れていく。複合はまだ実践段階に無いので模倣だけで今回は行く事にした。

そんでまあ、メイクデビューは特に危うげなく勝利を収めてきたのだが一つ気になる事があつた。それはレースの終盤、ゴールまで残り50mというところまで来たので、何となく観客席を見てみた時に見つけた。

何かいるのだ。そいつは私に走りを見せられた子よりも余程面白い顔をしていた。何とか親の仇みてえな目でこちらを見つめていたのだ。

今まで数えるほどしか不興を買ってないはずなのに何故かそいつは、私に対して激しく憤りを感じているようだった。まあ大方、真似されたやつの友達かなんかだろう。その時は興味が無かったのですが、何故か終わって数時間した今頃思い出した。多分、虫の知らせってやつだ。

(まあ…いいかあ。)

そんな事よりも、一刻も早く複合をモノにしたい。不完全でありながら皇帝の背中に迫ったのだから、完成させれば打倒も夢ではない。というか何より、このまま負けっぱなしではいつまで経っても彼女の泣き顔を拝めない。それは非常に良くない。

「ねえ、今ってお話できるかなあ？」

校内のトレーニング室に向かう途中、何か気怠そうな目をした女が話しかけてきた。

「何？」

「えへへ、実はわたくし、こういう者でしてえ。」

そう言うと女は名刺を突き出してきた。どうやら、トレーナーであるようだ。しかも、新人であるらしく、名刺を渡されるまで気付かなかったのだが、胸元には真新しいトレーナーバッジがついていた。

「探すのに苦労したよお。話しかけようと思ったらもう会場にいないんだもんさあ。」

「それで？」

「むう、愛想が悪いなあ。もっと優しくしてくれよお。」

「何の用だつて聞いてんだ。」

「ああ、そうそう。いきなりで悪いんだけどさあ、君い私の愛バになつてよ。君の走りを見た時ビビってきたんだあ。頼む、このとーり。」

凡そ新人とは思えない勧誘の仕方をするこいつは見た目通りに少し抜けているようだ。だが、まさか新人が引き抜きなんてしようと思うのには少し驚いた。こいつ心臓に毛が生えているらしい。

正直、チーム契約より専属のトレーナーを見つけた方が、何かと動きやすいから渡りに船だと思った。それにまあ、レースの後初めて声かけてきたのもこいつだしな。

「ん、あんまり指導とかされても聞かないよ？」

「全然良いよお、その内聞かす。」

「てか私、もうチーム入ってるけど。」

「全然良いよお、何とかする。」

「なんかやばい匂いがしてきた。」

「その反応ってことは良い？契約してくれる？」

しかし悪くない。今のところ、こいつに対する興味と契約したことで起こりうる事に対する不安が聞き合っている。しかし、好奇心には抗えない。

「・・・まあ、そこまで言うん「やったあ」聞けや。」

「やばい、何だこいつ。」

「私のことは気軽にトレーナーって呼んでよ。」

「気軽じゃねえだろ。」

こうして後はチームを脱退すれば1人でもレースに出れるというところまできた。

あれから早数日経ち、分かった事がある。この女、便宜上トレーナーと呼ぶが、トレーナーは非常に準備がいい。口約束を結んだ次の日に私が所属していたチームの監督に掛け合い、話をつけてきてしまった。そしてその日中に私は彼女と正式な契約を結ぶ事となった。

そして現在、秒で正式なパートナーとなった私と彼女は、今後の指針の擦り合わせをしていた。

「えつとねえ、君って中距離のメイクデビューに出てたよねえ。でも別にメイクデビューの後とかでもスプリンターとかの道に行ける訳だからあ、今んとこ君には2つくらい道があるんだけどさあ。」

嫌に間延びした声が部屋に響く。まだ無名のウマ娘と新人トレーナーなので貸し与えられる部屋も少しショボい。

「一つは短距離路線でえ、2つ目は中距離とか長距離の路線。」

「でも君がやらんならまあ、ステイヤーのが向いてんだらうねえ。因みに目標とかある？」

「ん、一応G1で4勝出来ればいいかな。」

「ああ、そんならまあステイヤー路線で三冠獲って適当に一回勝てば達成できんねえ。」

「あははは！まだ一回も担当ついた事ねえのに随分達者な口だなあ！」

「わはは。だって君なら3年あれば余裕だもんね。」

「はは！分かってんじやん。」

緩い雰囲気の中、大体の方針が決まってきた。目指すは三冠らしい。

「でも油断はしない方がいいかもねえ。」

「ていうと？」

「そうだねえ」

そう言うのとトレーナーはホワイトボードに何やら書き始めた。

「まずは今年、君の同期には〈黄金世代〉って呼ばれてる子達がいんだけどさあ、この子達は将来、あのシンボリルドルフに届き得るって言われてんだよねえ。先々週も黄金世代の2人がいきなりメイクデビューでかち合ったらしいしもうバツチバチだよ。」

ホワイトボードに適当な絵を描きながらトレーナーは続けた。

「次はあ、君の上の世代だね。ここら辺もまあ化け物ばつかでさあ、まずは3冠バの皇帝とかシャドーロールの怪物とか。後は最近どこ行つてつか知らないけどミスターシービーとかの辺りも手強いかなあ。」

「今言ったのは代表格ってだけで、本当なら1時間は講釈を垂れないといけないくらい色んな子がいるんだよねえ。」

成程、難敵は少ない方が嬉しいんだが仕方ない。寧ろこれからいっぱい心を折れると思えばまあ、悪くはない。

「でねえ、進路は決まったから後は道順を作ろうよ。」

「今年中にはまだジュニア級な訳だし獲りにいけないしさあ、そうだなあ：一先ずは来春の皐月を狙って一年間は準備期間って事にしようか。」

「まあ、…そうだな。」

そんな事を話しながら、この日はトレーナーと終日親睦を深めて終

わ
っ
た。
た。

幸運

トレーナーと契約してから、早数週間が経とうとしていたある日。
「ちよつと味見いつとく〜?」

トレーナーはそんな事を言った。何の味見かと問えば少し面倒臭そうにしながら彼女は二の句を告げた。

「同期〜」

「いく」

彼女が言うには、黄金世代の一人が近々G3のレースに出るらしい。何でもそいつは先々月の辺りにデビューしていて、私の同期の中では結構上位の実力を持っているから、何か私の成長の足しにでもなればと思っただけそうだ。

「2000mでえ、別にダートとかでも無いからさあ、練習は今まで通りで良いと思うよお。」

「そいつの名前は?」

「えつとねえ、何とかエブリデイみたいな感じだったかなあ…。」

成程、名前は結構分かりやすい。それならばすぐに大方の検討はつくだろう。時期が時期だから現時点ではちよつかいをかける必要は無いが、如何せん暇だったから丁度良い。実戦で複合を使う練習にもなるだろうから気合いを入れていこう。

そんな訳で、授業や練習の合間を縫って対戦相手の情報収集に東奔西走しているのだが、困った事にまずトレーナーの言っていたヤツが見つからない。まだ一年目であるから公式の記録などは期待出来ないし、ならばと思つてグラウンドに出てもパツと見そこまで図抜けて強い同期は見当たらない。

しかし、クラスメイトにそれとなく聞いてみればどうにか名前までは絞り込めた。だが、困った事にエブリデイなんて文字の入った名前がその中には見当たらない。

そのせいで無駄に長い廊下を右往左往するハメになった。トレー

ナーに聞こうと思っても連絡手段を持ち合わせていない。かと言って、彼女を探すのはちよつぱり難儀である。

少々躊躇われるのだが、思い切つてこの中で一番エブリデイに近い名前はどれか偶々近くを通りかかったウマ娘に問うてみる事にした。

「ひゃわあつり？」

くそつたれである。声かけただけでそこまで驚かなくなつていいじゃないか。

「……悪いね、驚かせて。聞きたい事があんだけどさ、今大丈夫？」

そう聞けば、多少怯む様子を見せたものの彼女はそれに応じた。

「え？あつ……ごめんなさい、今はちよつと……」

「んん？何か用事でもあんの？」

おつと、これは申し訳ない事をした。しかし一度こいつと決めたのだから出来ればこいつに答えて欲しい。見たところ火急というよりは楽しみつて感じだしほんのちよつとなら良いだろう。

「あ、は、はい。実家から荷物が届いたので、少し急いでるんです。」

「でけえの？」

「えつと……大きめのダンボール6箱分くらいです。」

「結構多いな。そんならまあ、足止めちまつたし半分手伝うよ。」

そう提案すれば彼女は多少困惑していたものの、一回で全て運べるぞ、とダメ押しの一言を言えば最後は了承してくれた。

そんな事をするぐらいならトレーナーを探した方が疑問の解決は早いだろうが、自分の不始末で招いた事にはキチツと責任を持ちたいのだ。でなければ、他のウマ娘を泣かす時に快く楽しめないからな。この何だかよく分からないポリシーもまた、少し偏屈な性格によるところである。

そんなこんなで場所は先程の廊下から少し離れて〈栗東寮〉。こいつの部屋は入り口から少し離れた所にあるらしいので、そこに荷物を運ぶまでの間に色々聞いてしまう事にした。

「そーえばあんた、名前は？」

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね！私はヘスペシャルウィークって言います！夢は日本一のウマ娘になる事です！」

…色々と情報量が多いな。まさか件の黄金世代の一人だったとは。こいつは僥倖である。一気に手間が省けたが、ここで焦ったって面白くない。

てか初対面で夢を語るのか。すごいな。

「んー、あはは。さつきよりも偉く元気じゃねえかよ。」

「……正直、手伝わってもらうまで怖い人だと思つてて。その……」

予想外の返答である。やはり、先程のオーバー気味なりアクションはそういう理由があったらしい。

……ちよつぴり傷ついたぞボケが。

「あはははは！私にビビつてたのかよ!!？」

「す、すいませんー！」

「はは、良いって良いって。てかそんな事よりさ、私達同期みたいだしよ、これからもよしなに頼むぜ？」

「あ、はい！勿論です！初対面でこんなに優しい人が悪い人な訳ありませんもんー！」

「はは、快活だなあ！」

んー、ちよつと元気が過ぎるけどまあ、話だけ聞いてれば少し抜けてる良い子ちゃんだな。しかし今は、内面よりも余程気になる事がある。こいつさつき、日本一がどうか言つてたよな。

「てかさ、さつき言つてた夢って……」

「はい！日本一のウマ娘になることです。」

「へえ、良いね。夢は大きくないとつまんねえもんなあ。」

そう言つてみると、スペシャルウィークは平時でさえキラキラした目を、一層に爛々と輝かせてこう言つた。

「ありがとうございますー！」

やっぱり根っから良い子なんだろうなあ。人を疑うつてのを知らない顔してるわこいつ。……ん？

(スペシャルウィーク……エブリデイ……ウィーク……エブリデイ

…)

成程、合点がいった。あのトレーナーあの齡にして既に痴呆を患っている可能性が出てきた。とんだ間抜け話もあったもんである。

「あ、着きましたよ。ありがとうございます！」

そんな事を思っているとスペシャルウィークはそう言った。大方全ての疑問は解決したので試しに一つ、ほくほく顔のスペシャルウィークに聞いてみる事にした。

「お前ってさあ、もしかして近々レース出たりする？」

「え!?? 何で分かったんですか!??」

そんな事を聞かれたって仕方が無い。元々貴方をシバく為に私も出る予定でした。なんて言える筈もない。仕方が無いからひどく驚いた顔のスペシャルウィークには、気のせいだとか言つて適当にはぐらかしてからその場は退散した。

しかし今日の私は運がいい。実は、少し気を揉んでいたのだ。もし、件のレースに出るそいつが、夢など持ち合わせずにのらりくらりしていたらどうしようと。しかし、そんな考えは杞憂に終わった。

良いじゃないか、日本一のウマ娘。この種族に、この島国で生まれ落ちたなら誰もが一度は考えつくだろう。それほどに尊大な夢を、彼女は本気で叶えようとしている。いや、もはや夢でも無いのだろう。黄金と比喻される才能と、この学園に辿り着くまでの努力に裏打ちされた確かな自信。きつと今まで、幾度もの苦難を乗り越えてきたのだろう。それでも尚、曲がる事なく、ただ愚直に、それだけを追い求めて。

しかし、眼を見れば分かるものだ。何を他人の分際で偉そうに、とは思いますがそれでも、分かってしまう。

(苦難はあっただろうけど、挫折は無かったんだろうなあ…)

別に嘲笑しようとかいう訳ではない。ただ素晴らしく良い、と思っただけだ。今まで一度だって折れなかったその誇り高き精神を、もうすぐブチ折れるのだ。

来るレースにて、彼女の人生で培ってきた何もかも全て、奪つて舐つて遊び尽くしてやりたくなつた。そう思えば今からやる気がム

ンムン湧いてくる。今日は厄日だと思っていたが、そんな事も無いらしい。

初公式

さて、スペシャルウィークの味見まで残り1週間程度に迫ってきているのだが、ここで一つ面白い事案が発生した。それはもうすぐ昼休みになり賑わうであろう、この学園の食堂にて起こった。

「あーと…そういえば名前をまだ聞いてなかったような……」

というのは、食堂の入り口付近にて再び話す機会にあったスペシャルウィークの談である。

「ああ、また会ったねスペシャルウィーク。んー、まあ名乗ろうか。……こほん。私の名前は〈デイズオブレスト〉。親しみを込めてデイズと呼んでくれていいぜ。」

「わあ、カッコいい名前ですね！改めてよろしくお願いしますデイズさん！」

「ん」

そんな風に何気なく会話をしていると、

「ああ、やっと見つけた！スペシャルウィーク、貴方まだ私の数学のノート…って、え？」

そんな風に何やらぼやく声が私の後方から聞こえてきた。何だと思っただけで声のした方を振り向くと、

「な、何で貴方が？」

いつかの模擬レースで私を睨み散らかしていたウマ娘がそこに突っ立っていた。

「あ、わ、忘れてました！今取ってくるので待っていてくださいキングちゃん！」

どうやら今のこいつの眩きは聞こえていなかったようで、スペシャルウィークは大急ぎで何処かへ行ってしまった。そして、キングと呼ばれたウマ娘と二人きりになったので、少し会話を試みることにした。

「んー、あんたの名前は？確か私の模擬レースにもいたよな、暇だし友達になろうぜ。」

「なっ……あ、貴方まさか、覚えてないの?」

「んん? 私の数少ない知り合いであるのなら覚えていない訳がない。ということは、何か昔に会った事があるのかな。マズイぞ、相手が覚えていて自分が覚えていないこと程気まずい事も中々無い。」

「ごめんな、会った事があるんなら私覚えてねえや。会った時の事教えてくんねえか?」

「そう言ってみれば、彼女はその内プルプルと震え出して、面白いことに声まで震わせてこう言った。」

「ーふ、ふぎけないで、デイズオブレスト。私の名前はヘキングヒーローよ。披露会での事を忘れたとは言わせないわ!」

「おお、二言三言交わしただけで怒られるとは思っていなかった。キングヒーローといえは黄金世代の一人だな。しかし披露会か……ああ、いつだか私が初めて実戦形式で模倣を使った時のやつか?」

「んん、てことはお前、もしかしてあん時ドベだったやつか?」

「!!? あ、貴方って人は! 私はあの時の事を一度も忘れた事は無いわ!」

「覚えてねえつつつてんだろタコ」

「な、なん「キーング!」ぐえっ。」

「今日は乱入者が多いな。何か言おうとしたキングヒーローの横っ腹から勢いよくマスクをつけたウマ娘が飛び出してきた。」

「やっと見つけマシター! もう、置いてくなんてひどいデスヨ!」

「は、離しなさいエルコンドルパサー! 貴方がまた先生に呼び出されるのが悪いんでしょう!」

「それは仕方ないことデース!……ン? 誰ですカ、この怖い人ハ?」

「おつ、良い度胸だ。エルコンドルパサーか……覚えてぞ。てかこいつも黄金世代じゃなかったか?」

「あははは! 初対面で随分ご挨拶じゃねえかよ!!? まあ、いいや。用事があるから私はここらで失礼するぜ、またな。」

「あ、ちよ! 待ちなさい!」

(しかしまあ、中々厄介そうだな。)

会場に向かうトレーナーの車の中でしばらく思索に耽っていたがやはり彼女たちの実力が気になり始めた。あの二人、まずキングヘイローの方は多分、筋肉の発達具合からしてマイラーの路線に行けば活躍するだろう。あいつの瞬発力は可能ならば是非一度見てみたい。エルコンドルパサーはパツと見でしかないが、中々のパワーを持っている。まだ発展途上である事を含めれば将来は計り知れない。

別に楽しみとかでは無い。もしクラシックから上で当たることになれば物凄く面倒臭そうなのだ。あの手の輩はガチガチの天才肌である。しかも努力を怠らないタイプの実真面目な天才である。出来る事ならかち合いたくはないが、万が一を考えて色々とマークしておいた方が良さそうさ。

「おうい、着いたぞぞ。」

「ン、てんきゅ」

会場に着けば中々の熱気が私を出迎えてくれた。あまりグレードが高いわけでないのにやたらと客の入りがいい。レース場に向かう観客は皆が皆どこか興奮しているようだった。成程、これも全てスペシャルウィーク目当てなのだろうな。黄金世代と褒めそやされるだけの事はある。

「なんかめっちゃ人いんね〜。」

「淡白が過ぎるだろうが。」

このトレーナーは中々フワツとしているので、初めて担当が公式レースに出るというのにこのリアクションである。

「嘘だよ嘘。今日は勝っても負けても楽しんでくれたらいいよお。」

そう言うのとトレーナーは少し笑みを深めた。……参ったな、まさか目論見に勘づかれるとは。

「……やっぱ駄目?」

「わはは、まさかあ。実はねえ、一瞬でも長く、担当の子が笑っていられるようにするのが私のモットーなんだあ。だからねえ、君がどんな道に進んだって、最後に笑えてればそれでいいよお。」

……不覚にも少しうるつときた。多分、本気で勝ちを目指すウマ娘からしたらこいつはあまり良いトレーナーでは無いのだろう。しかし、私の様なならず者の自覚があるやつからすると、こういう事を言われるとちよつと心に刺さるのだ。

「……ん、さんきゅ」

「頑張りたまえよお。因みに今日はあ、勝ったら焼肉でえ、負けたらラーメンに連れてくからねえ。」

手厚い事である。そんな事を話していればもうパドックに出る時間が迫っていたので、トレーナーに別れを告げて向かうことにした。「あーデイズさんじゃないですか!」

何の気なしに歩いていれば、そんな事を言いながらスペシャルウィークが駆け寄って来た。

「おお、スペシャルウィークじゃん。今日はお手柔らかに頼むよ。」

「もおく、出るなら先に教えてくれたって良いじゃないですかあ。」

「あはは、言うの忘れてた。てゆうか、出走者の名前とか事前に出てたんじゃないの? てつきり知ってるもんだとばかり。」

「はい! トレーナーさんに言われた気がしますけど、お腹が空いたので覚えてませんでした!」

何故こんなにも恥ずかしげなくそんな事を言えるのだろう。いや、これも愛嬌か。……愛嬌だよな?

『18番人気〇〇〇〇〇〇。今日が初めての——』

お、アナウンスが始まった。そろそろゲート入りの時間である。

「今日はお互い全力でやりましょうね!」

そういうと彼女は駆けて行った。さつきお手柔らかについて言ったのが聞こえてなかったのかな。……まあ、いいや。

『6番人気5枠デイズオブレスト。メイクデビューから短い間隔での出走となりました。好走に期待したいですね。』

6番人気で結構いい数字じゃないだろうか。今日はスペシャルウィーク以外だと差しの脚質で気になるのが一人いるが、彼女と比べるとそこまで警戒する必要は無いように思える。

『1番人気4枠スペシャルウィーク。実力は完全に上位ですね。貫禄

すら感じます。』

成程、高々ジュニア級風情に一体何の貫禄を感じたのかは知らないが、司会も彼女が勝つ事を心無しか期待しているように思える。

話は変わるが、前も言ったように私は本能というものが欠如しているので、ゲートに入っても特に何も感じない。精々がちよつと狭くていいなぐらいの気持ちである。ゲートの中が苦手なウマ娘は多いらしいが、私からすればゲートにビビれるのは少し羨ましい。ちよつと気になるのである。

『……………ガチャン！』

「あ、」

下らないこと考えてたらちよつと出遅れた。スタートから出鼻を挫かれたが、最悪差して行くので問題無い。スペシャルウィークは……………、先行であるようだ。今日はフルゲートって訳でもないから彼女以外はそこまで注視する必要もないだろう。全貌を見渡すには一度最後尾に行かねばならないし、相手が強ければ強いほどレースは不確定要素が増える。少しでも敗因に繋がる懸念は無くしておきたいのだ。

とはいえ、中盤の辺りまでは少し後方で観察に徹する腹づもりである。逃げは、いるにはいるが特段の脅威は見られない。そして、気になるスペシャルウィークのフォームだが……………

(ン、まあ同期ん中じや上位ってだけはあるわな。確かに綺麗っちゃ綺麗だけど……………ちよつと粗いなあ。)

メイクデビューを除けば最後にマトモに模倣したのが会長さんになるので目が肥えている可能性は否ないが、それを差し引いても改善点が目立つ。フォームというのは、細部までこだわるといふよりは、自分にとつての最適解を探る上で徐々に洗練されていくのが普通なので、経験の足りない彼女のものに粗が目立つのは仕方が無いのだが、ハッキリ言ってしまうえば興醒めである。

しかし、自称フォームソムリエの私は、ガツカリするだけでは終わらない。もつと言うところのままだと普通に勝つだけになるのでそれは面白くない。

(良い健脚だよな。少し間隔を広げて、上半身……いや、リズムはもつと呼吸と振りを合わせるのがベスト。ここら辺は場数を積まないが無理か。こいつは勢いに乗って加速するタイプかな……、なら相手を抜く時の加速は見せてやるか。後はバ郡に呑まれた時のも見せておきたいけどな、運がちよつと絡むかな。)

もうそろ1000m地点なのでちよつと前に出る事にした。とりあえずは彼女のフォームを見せて潰しにいつてみる。出来る事なら今回で私が見せたやつを吸収してもらえればお互いに有意義なものになるのだが、果たして気づけるかどうか。

戦況は時間が経つにつれて少し煩雑になってきた。今のところ先頭は逃げだが、アレなら終盤に潰れる。スペシャルウィークは4番手に位置しており、このままであれば充分1着を狙えるだろう。

少しずつ加速する。彼女から1バ身程度距離を離してからやろう。一人抜いた。後二人、ちよつと煩わしいので更に加速する。すると一息に抜けた。中々スツキリする。草とりで良い感じに根っこごと引っこ抜いた時のあの感覚である。中々どうして今抜いた奴らも弱くはないのだろうが、黄金世代のネームバリューによる会場の熱は、大多数のウマ娘にとってアウェイの空気感だ。気圧されても仕方がない。そんなわけで、残るはスペシャルウィークただ一人である。

徐々に、それでいて確実に距離を詰め、……抜いた。抜かれても変にペースを乱さないのは流石といったところか。

さあここからが本番である。さつき予め考えておいた彼女のフォームに切り替える。今回は前のウマ娘と距離が詰まっているので下手に後ろは見えない。その代わり耳を澄ませる。

彼女は何かペースを保っていたが、1500m地点に差し掛かった頃、少し息が乱れてきた。流し目で見やれば、スペシャルウィークは少し前傾になってきている。

(シ、こいつ加速の脚残ってるかな。)

残り400m。逃げのウマ娘はいつの間にか沈んでいたもので、後は二人抜けば私がトップである。しかし、そんな心算をしている内に埒外から面白い事が起きた。

(お、加速してきた。)

驚いた事に、既にスタミナが尽きかけていたスペシャルウィークが、私を追い越さんと加速を始めたのである。一か八か勝負に出たと見た。いや、この場合は賭けに出た事よりそれをする気力があつた事に感心してしまう。

とはいえ、そういう事なら話は別である。

(二人目、もうすぐ加速するかな、けどまあもう遅いな。ギリギリ……腕がぶつかるのは避けたいかな、強く踏み込んで左のスペース。二人目はその反対。)

ン、中々悪くない感じに抜け出せた。残りは200m。

「む、むりいいー!」

一人落ちたか、根性無いなあ。スペシャルウィークは……お、結構粘ってる。頑張れ黄金世代、1番人気だぞ。

(やっぱりするしかないかなあ。)

残り100m地点。後続とは2バ身離してそのまま進んでいる。このまま順当に行けば私の勝ちなのだろうが、果たしてそれで良いのだろうか。

碌に成長しきってないウマ娘を颯り散らして1着を獲ったって私は嬉しくないし、楽しくもない。そもそも若い芽を摘むというのは褒められた行いじゃない。G3ならばわざわざ勝ちに行く必要もない。

ここまですえれば私が何をしようとしていたか大体察しはつくんじゃないだろうか。

『残りは50m、先頭はデイズオブレスト、2バ身離——おおつと? これはどうしたデイズオブレスト。見る見る内に失速していきます。何かトラブルでもあったんでしょうか。』

名付けて、勝負に勝って試合に負けたる作戦である。内容は至ってシンプル。もう他のウマ娘が減速する間もないとこまで来たらしれつと速度を落としてワザと勝ちを譲るのである。あれはどういう事だとか聞かれてもなんか腹が痛くなったとでも言えば何とかなる。

そして25m。後続に呑まれ、追い越されていく。と言ってもいつの間にかスペシャルウィークの前にいたやつはいなくなっていて、彼

女が私と二人旅している状況になっていたので、追い抜かしたのはスペシャルウィークだけである。しかし、追い越される瞬間おもしろいものを見た。

(ん〜？ん、い〜い顔してんじゃん。)

彼女、スペシャルウィークは追い越す瞬間、目ん玉からゲロ吐きそうな顔で、今にも泣きそうになりながら口を固く結んでいた。

『——スペシャルウィーク1着でゴール！3バ身離して黄金世代の意地を見せつけました。——2着はデイズオブレスト。途中アクシデントに見舞われたようですが——』

そんな実況の声が聞こえる。

負けはしたが楽しめた。惜しむらくは叩き合いとかにならなかつたからイマイチ観客の盛り上がりに欠けたかもしれないという事だ。私の初公式レースは2着という結果で終わったが、存外に悪くはない気分で完走できたからまあ、良しとしよう。

問答

(これでラーメン決定か。……醤油か味噌だな。)

ゴールラインを踏み抜いた後は、ゆっくりと減速しながらそんな事を考えた。

だが、それと同時にスペシャルウィークのフォームの復習もしておかなければならないだろう。不完全燃焼かと言われればそんな事は無いのだが、一応スペシャルウィークのフォームをもう一度確認して、再戦した時用に少し崩しておきたいのだ。

というのも、推察の域を出ない話にはなるのだが、スペシャルウィークは恐らく今回で見せた改善されたフォームをほぼ確実に自分のものにする。でなければ、黄金などという御大層な二つ名はつかないだろう。

目の前に私を見下ろすかの如く聳える電光掲示板に、今日の結果が映し出された。私とスペシャルウィークは2バ身程度の差がついていて、3着以下はそれよりも幾分か差があつた。

凡そ予定通りであつたので、出来る事ならこのまま穩便に帰路につきたいのだが、残念ながらそうは問屋が卸さないらしい。

「……最後の直線、どうしてあんな事をしたんですか？」

歩み寄ってきて、彼女はそんな事を口にした。それは、いつもの彼女からは想像もつかない様な低音での問い掛けであつた。

「ン？ああ、私の落ち度さ。なんか腹が痛く「ふざけないでください。」……おおう。」

変に声を荒げない辺りまだ少し理性があると見える。いや、時たまキレ過ぎると冷静になる奴がいるらしい。これは……マジギレか？マジギレなのか？

……だとしたら、理由が分からないぞ？

「お前……勝って嬉しくねえの？」

勝てば官軍の言葉が示すように、どんな理由があつたって勝ち負けは勝ちで、負けは負けだ。少なくとも、命のやり取りでもないただかだかレースで、忌むべき勝利など無い筈だ。

「……は？」

「まあ、今回は私の自己管理が招いた結果さ。いつか必ずリベンジしてやるから待ってろよ」

ちよつと突っかかられるのが久しぶりなので少し遊んでみる事にした。わざと大袈裟に、身振り手振りで今の心情を表してみる。

そうしてみると、スペシャルウィークは俯いて、何やら呪文を唱え始めた。

「……や……い……」

「ん？ぱーどうん？」

「ふざけないでください!!」

おつと、草である。ようやく吠えてくれたか。やっぱり勝負事は私が感情に流れられない分、他の奴で楽しまなくてはな。

「分からないでも思いましたか!?あの瞬間の!あの減速が!故意である事に私が気づかないでも思えますか!?」

興奮した様子で彼女は続ける。……わ、泣きながら言ってるぞこいつ。全く若人はこれだから素晴らしいな。

「貴女の眼には私がおの程度に見えていたんですか!?私が!手を抜かれたことも気づかないような!マヌケに見えたんですか!?」

実はちよつとそう思ってたつてのは内緒にしておこう。一頻り怒鳴った後、まともや俯きがちに今までとは打って変わって静かな調子で彼女は続ける。

「……分かって……るんですよ。今の私が……貴女よりも弱いなんてこと。今日だって……調子は……良かった筈なのに……最後なんて……全部ぐちゃぐちゃで」

ポロポロと大粒の涙が、宝石のそれよりも純粋な煌めきを持った瞳から零れ落ちる。彼女は今醜態を晒していて、私がその元凶である。しかし、何だか彼女のその様が、涙を堪える幼子のように見えて、ひどく愛おしく思えてしまった。胸の真ん中辺りが嫌に騒めく感覚がした。

「貴女の走り……出来もしないのに……私の走り方を盗られた気になつて……それで……」

「……私は、私は貴女にとって、勝負する価値すらありませんか？」
「聞かねえと分かんねえの？てかよ、そこまで分かってて良く文句言う気になったな。」

もうちよつと虐めてみたい。ギリギリを攻めていこう。

「黙ってられる筈ないです」

反論を呈す事も考えたが、周囲のウマ娘や観客が私達の異変にうつすら気づき始めたので、そろそろ切り上げる事にした。

「まあ、いいか。とりあえず1着おめでとう。次は負けねえよ？」

「！だ「デ〜イ〜ズ〜！大丈夫う？」…っ」

適当に締めて踵を返した。スペシャルウィークは何かを言おうとしたが、奇しくもこちらに駆け寄ってきたトレーナーの声により、それは掻き消された。

「ン、腹痛い。運んでちよ」

「おおい、マジかよお。他は大丈夫う？」

「ン」

そう言うと、彼女は私の膝と背中の中の辺りを器用に抱え、俗に言うお姫様抱っこで運び始めた。

「え、こんな無様な運び方ある？めっちゃ恥ずいて」

「喧しいぞお。ただでさえ他の子泣かしてんだからさあ、文句言うんじゃねえの。」

「成程、厳正な処罰だな。甘んじて受け入れるわ」

——二日後。

あの後、医務室に行くまでに偽装工作の為、トイレに行く嘘ついてトレーナーに隠れてウマ娘パワーで自分の肋を殴りつけ、全治一ヶ月程度に肋骨にヒビが入っていると診断された私は、特になんの疑いを掛けられることもなく学園で療養生活を送っていた。そりゃあ、そうである。肋骨にヒビ入ってるやつが手の抜きようなんてない。

寧ろそれが入着して、観客目線では一着と互いに健闘を讃えあった(ように見えた)のだから根性が凄いという話になった。怒鳴っていたスペシャルウィークは、怪我までしてレースをやめなかった私を諫めていたという事になっているらしい。

まあ、そんなぐらいいなっていてくれなければ、ラーメンを代償にし、死にそんな思いをして文字通り骨を折った甲斐が無いというものである意味で予定調和である。

「今日は梨持ってきたからさあ、これでクマさんつくってみようよお」
「シカがいい」

「角がむずすぎるよお」

毎日律儀なもんである。トイレに行った担当が、数分後に出てきた時には這う這うの体になっていたのだからその時の彼女の驚き方は尋常ではなかった。記録として残しておきたいぐらいには面白かった。もつとも、その時の私にそれを笑うだけの気力は無かった訳だが。

「しつかし君も無茶するねえ。あの後上司さんとかさあ、色んな人に監督責任問われちゃったよお。体力とか大丈夫なのお？ガツツリスタミナつけるメニュー考えとこうかあ？」

「いや、マジで反省してるから勘弁して。」

今回の一件でちよつぴりの借りがトレーナーにできてしまった私は、彼女の指示に表立って反対できる立場では無くなってしまった。

「はい、嘘ついた。治ったら罰走決定え。」

「ちよ、そんな殺生な」

なんだかんだでいつの間にか手籠めにされてしまっていた。しかし、今は気兼ねなく話せる人間がいないので、これはこれで楽しかった。

レースの結果については、スペシャルウィークやそのトレーナーが何か言ってくるかと思っただが、不思議なくらい何の音沙汰も無かった。流石に幾ら不正を吠えたところで事実がある以上無駄だと分かっているのだろう。少し勘繰りすぎていたようだ。

そんな事を考えていると、トレーナー室の扉をノックする音が聞こえた。

「失礼します」

そう言っに入ってきたのは栗毛の、清楚な雰囲気ウマ娘だった。……こいつ確か、スペシャルウィークと当日一緒にいたやつか？あんな

時はどうせチームの先輩かなんかだと思って気に留めなかったが、このタイミングで訪ねてきたという事は、何だか嫌な予感がする。

「この時間帯であれば此方にいるとお伺いしたので」

「お〜？君は確かヘグラスワンダーだねえ」

「はい、連絡も取らずに押しかけてしまい申し訳ありません」

そう言うのと彼女は綺麗にお辞儀をした。どうでもいいが今まで見てきた中で一番髪がサラツサラである。率直に言っただけと羨ましい。

「別にいいよお、それで今日はどんな御用かなあ？」

「ええ、その事なんですが」

あ、やばい。何かこつちに目を向けてるぞこいつ。……え、こわ。すつげえ底知れない感じの目だ。しかも絶対怒ってる。目がめっちゃ冷たいもん。

「デイズオブレストさん…ですよね？貴女にどうしても言いたい事があるんです。今は、お時間よろしいでしょうか？まあもつとも、よろしくなくても聞いていただきますが」

想像の5倍キレてた。

グラスワンダーは清廉とした確かな歩調で、此方に歩み寄ってきた。何というか……こう、武士みてえなやつだな。こいつ絶対九州産だろ。

後に外国産と知るまでは、私の中のこいつのイメージはヤクザであつた。

(だがなあ……)

これは良くない。別に口喧嘩などは幾らでも買って出てやるが、トレーナーがいるところにするには少々過激になる。

「おつと、ここではそこまでするにはおこうぜ。そうだな……私の部屋にでも来るか？あんたも年頃の乙女だしな、ここは一つ腹を割って話そうじゃねえかよ」

そう提案してみれば、彼女は一瞬目を細め、何やら疑っていたようだが、すぐに私の意図に気付いたらしく、その旨に同意した。

寮部屋にて。

彼女を先に通し、私は扉側に立つ。ここは三階なので、これで私が満足するまでゆっくりお話が出来るといふ寸法だ。そして、対面する形で対話は始まった。

「さて、……穏やかじゃねえなお前。何の用だよ」

この期に及んで何故こいつがキレてるか察しがつかない訳では無いが、念には念を入れておこう。

「ですから言っているでしょう。貴女とお話がしたいのです」

「その内容を聞いてんだ」

グラスワンダーは訝しげな顔をして、今の心情をありありと乗せた怒気の籠った声で言った。

「まさか自覚が……無いのですか?」

は、馬鹿でえこいつ。その聞き方は悪手ってもんだらうに。

「……うっするてえとアレか? 私はスペシャルウィークになんかしちまったか?」

「……分かりました、単刀直入に聞きます。貴女のその怪我、レースの後に出来たものですね?」

ああ……要件で仇討ちかなあ。別にお互い良い経験だったと思うんだけどなあ。どうにも容量が悪い。

「なんかさつきからお前マジでムカつかせんな。次似た事言ったらぶちのめすぞ。幾ら何でも度が過ぎるだろうが」

「それは此方の台詞です。ある程度レースに出た事がある者ならば、あれが怪我によるものかどうかなどというのは、看破するにそう難くないですよ?」

へへ、無理だわこれ。まあ仕方ねえや。パンピーならいざ知らず、こいつを騙くらかすのは厳しいよな。

……しかし、こいつは眩しいな。どこまで行っただって所詮は他人。その他人の為に確かな怒りをその胸に抱ける。あほくせえタイプのウマ娘だ。

私みてえな三下からすりやあ目が痛くなつちまう。

「成程、義憤てえやつか！あはははは！こいつあくだらねえ。くだらねえよお前！」

「……………貴女」

ヒビ。ちよつとからかつてみたくなつちまつた。こいつは分かつてねえようだしここは一つ教えてやろう。

「てめえ、*“仁義”*って言葉あ、知ってつか？」

今にも憤慨しそうなグラスワンダーを手で制し、そんな事を聞いてみる。

そう言うや否や、目に見えて分かる程にグラスワンダーは機嫌が悪くなつた。さつきまでは眉間に皺を寄せていたが、今は至つて真顔である。あんまり怒りすぎるもんだからプツンしちまつたのだろうか。

「知っていますが」

「はは、ならいいや。聞くがお前え、飽くまで憶測の範疇でよ、怪我人を怒鳴りつけるってなあどういうモンだい？善い事なんかい？」

「私は、レースに於いて礼を欠く輩に通す仁義を知りません。それに、」

彼女は臆す事なく言った。

「私は善悪のみで物を考えている訳ではありません」

お！いいねえ……………まあそうか。ある程度察しはついてたが、こいつはこいつで、相当覚悟してここに來たつてなあ訳だ。

「ソク。で？そのまま私をブン殴つたり「貴女、敗者について何か思ったことはありますか？」言わせてよ」

うひい。 敗者ねえ…………

「ねえかな」

「ならば、今一度考えてください。貴女は、己の努力や想いを、弄ばれたいのですか？」

「待てよ、私は負け犬だぞ？スペシャルウィークつてのは残忍なやつだぜえ、勝つても悔しいつうんだからよおつ」

刹那、脇腹の辺りに言い表し難い激痛が走る。

「貴女という人は！デイズオブレスト!!？」

はは、胸ぐら掴まれてら。

「痛つてえなあ」

そうすると、グラスワンダーは我を取り戻したかのように顔を顰め、その手を緩めながら二、三步距離をとった。俄然その目には、迸る怒りを湛えたまま、しかと此方を睨みつけてくる。

「そのさ、誰かさんの想いだけか努力つてなあはよ、私に何か関係があるのか？」

「関係が無くとも、慮るのが礼儀というものです」

マジかよ。マジで言つてんのかこいつ。

「その……何？慮つて何になるんだ」

「何にならずとも、全力で戦い抜くくらいはできるでしょう」

「お前、競争の世界でそれは致命的だぞ。」

思わず大真面目に言ってしまった。

「弱い奴が悪りいだろ。弄ぼうが何しようが、そんなにされたく無かったら私より強けりやいいじゃねえか」

「敗者が敗者のまま終われるように」

ム。

「最後は潔く、自分は戦った」と思えるように、終わらせるべきではないですか」

「私は、何もいちいち顔色を伺ったりしろと言っています。」

「半端に過ごせればいいという心算で、この学園の門戸を叩いた者はいません。しかし、弱者と強者の境界は、明確にあります。」

「自分達と同じように、夢を見た者を降すのならば、例え何にならずとも、全力を尽くすのが『仁義』でしょう」

ふむ、何か負けた気分だわ。ああ、やだやだ。ただまあ、ここまで言うんなら、こいつもちよつと試してみてえな。

「ん、いいね。言葉じゃあ埒が開かねえからさ、どっちが正しいか、脚で白黒つけてみるつてなあどうよ？ウマ娘らしくさ」

乗ってくるかは一か八かの賭けであったが、意外にも冷静に彼女は言った。

「元より……そのつもりです」

「ただ、忘れるなよ？ 私は飽くまで怪我で二着に甘んじたんだ」

——数分後。

先程の会話を少しやんわりさせてトレーナーに話してみると、そういう事なら調整は任せるとの事だった。ここ最近苦労を掛けっぱなしなので、少し申し訳ない気もする。近々何か好きな物でも聞き出してプレゼントしてやろうと決めた。

「そうだねえ……皐月賞の前座がねえ、来年の三月にあんだけどきあ、そこら辺で白黒つけてみれば良いんでないの〜？」

「なんてレースよ？」

「グレードは2でえ、名前はスプリングステークス。これで三着以内に入ったら皐月の優先出走権を貰えるねえ。」

「結構時間空くな。他はダメか？ てかあいつ乗ってくるかな」

「いやさあ、君の実力ならあと1、2回何かに出ればこのレースも問題ないしさあ、余計な不安はあんまり呼び込みたくないんだよねえ。それにまあ、君ってやる気にさせるの上手そうだし、何とかなるよお」

「ん〜、まあそうだな。頑張れば何とかなるだろ」

それに時間を空ければグラスワンダーも少しは成長しているだろう。急いで事は仕損ずるとも言うし、ここは大人しく待つのが賢い選択だろう。しっかしその間何してようかな。でももう頭が回らない。まあ如何せん、今日はもう疲れた。

何気にさつきグラスワンダーに掴み掛かれた反動で破茶滅茶に肋が痛いのだ。自分に非があるとはいえ、流石にグラスワンダーはちよつと荒ぶりすぎである。

（今日はもう大人しく過ぎそう。深くは明日から考えよう）

そんな事を胸に抱きながら、私は徐々に微睡んでいった。

胎動

別に何て事は無い休日であった。

いつだかの怪我もようやく癒え、目標のレースまではまだまだ時間があったが、そろそろ練習を再開する事になった。人が多いのではトレーニングもし辛いからと、その日は偶々学園から少し離れた市営のグラウンドに行ったのだ。設備はやや学園のそれに劣るが、それでも一般的に見れば充分な範囲であった。それに加えて今日は人もまばらであるからうつつつけである。因みに私のトレーナーだが、今日は偶然会議が入っていたようで、久々に一人だけでトレーニングすることになった。それこそ、病み上がりで自主トレーニングをするのは愚行ではないかと他ならぬトレーナーに窘められたが、軽い準備運動程度に済ませると託けておいたから大丈夫だ。

話は変わるが、今日はそれとなく気分が良い。普段であれば碌に手入れもせずに粗野に扱っていた練習用のシューズも回歸早々に怪我はしたくなかったから念入りに磨いたし、昨晚だって風呂上がりにストレッチをして寝たから今朝の目覚めも素晴らしいものだった。練習できる喜びなどではない。十全に健康的な生活を送れたからちよつぴり嬉しかったのだ。言ってしまったえば私はとっても良いコンディションだったから、俗に言う絶好調ってやつだったのだ。

「ねえ、君」

鼻唄混じりに走る支度をしていればふと、背中の後ろ辺りからそんな声が聞こえた。今私はグラウンドの隅の方にあるベンチに座って靴紐を結んでいるのだが、私と声の主以外の人影は無い。つまりはそういう事である。

「ん〜?」

振り返ってみると、目算で私よりも幾許か上背のあるウマ娘が、私を見下ろす形で立っていた。何の偶然か丁度太陽を背にする形でそのウマ娘はそこに佇んでいた。影となつてイマイチ見えていないのだが、どうにもよつぽどの美丈夫であろうというのは顔の輪郭から容易に察せられた。

「そのジャージって事は、トレセン学園の生徒だよな？」

「つすね。それで、何かありましたか？」

見下ろされながら話すのも気分が余り良くないから、紐を結ぶ途中であつたが立ち上がって話し始めたのだが、振り返ってみれば中々どうして大方の予想通りの大層な美丈夫がそこにいた。どちらかと言えば「可愛い」とかよりかは「格好いい」とか「綺麗」とかの褒め言葉が似合いのウマ娘であつた。

……しかし、どつかで見た顔であつた。今ここで「会った」という表現をしなかつたのはどうにも私がいいつを見たのは恐らくビデオの中であろうと思つたからだ。たださえ少ない交友関係なのだから流石にそれぐらいは分かる。しかし、目の前のウマ娘が誰であるかは依然として判然としなかつた。名前を聞くかフォームを見せてもらうかすれば容易に判別がつくのだが、出会つて数瞬も経つていないのにそこまで馴れ馴れしいこともできない。

「！ そっか……ふふ。今ちよつと暇でね、少し退屈凌ぎに付き合つてくれないかなつて」

こいつ今、少し驚いたな。多分あれだ。私の推測が正しいんなら目の前のウマ娘が自分の事を知らないとは思つていなかったんだ。

……しかし、何だかよく分からないぞこいつ。初対面なのに何でそんな事を言ってくるんだ？ 今ご機嫌にシューズを履いていた私が他人の暇つぶしに付き合うくらい暇してるように見えたつてののか？

「少し……失礼な事言いますけど、もしその小綺麗な目ん玉が正常なら、私がそこまで暇してる様には見えないと思うんですけど」

「ああ、ごめんごめん。気分を悪くしたんなら謝るよ。でもさ、病み上がりの君が一人つきりでトレーニングっていうのはどうなのかな？ 大丈夫、絶対に無駄な時間にはしないから」

「！」

マジに何なんだこいつは。私は今、こいつが言っていた通りに上下ジャージを着ているから脚はおろかまともに体しか見えていない筈だ。それが一体どういう理由があれば私が病み上がりである事に勘づけるのだ。

ただまあ、それはそれとして少しこいつに興味が湧いた。何処にそんな自信があるんだか分からないが余程自分の口に自信がない限り、初対面の輩にこんな啖呵は切らない。不思議な事に、ここまで言うんなら話してみるのも吝かではないとこの時自然と思ってしまった。

「まあ……別に大丈夫ですよ」

「ほんと？何かゴメンね、けどそんなに時間は取らせないからさ。それと、何かから何まで我儘で悪いんだけど、もう少し静かに話せる所に行かない？」

「はあ…」

「まず幾つかテーマを出すからさ、それについて2人で考えて、話し合ってみようよ。言うなれば、ある種の議論かな？」

歩きながら彼女はそんな事を言った。……ちよつぱり不安になってきた。今まで己の直感に任せて生きてきたのだから哲学的なノリのものはてんで疎いのだ。しかし、やると言ったのであれば最後までやり切らねばそれは不徳というもんだ。……地味に後に退けないのが辛い。しかもいつの間にか先のベンチではなく観客席のような所に連れられてきていた。いよいよこいつ走らせる気がないぞ。

「じゃあ一つ目。勝利に必要な条件って何だと思う？」

「……参考までにお伺いしても？」

思ってたより全然難しい事だった為、彼女に意見を仰ぐ事にした。こんな事を暇つぶしで考えてんならそれ以外の時はフェルマーの最終定理でもやってんのかな。

そんな事を考えていると、快晴の空を見つめながら思索した風な彼女はやがて、口を開いた。

「そうだなあ……やっぱり『強さ』じゃないかな。一見原始的に見えるけど、何かの勝敗を競う上で1番重要なピースだし」

彼女は飽くまで視線は上に向けたまま、言葉を続けた。

「だけど一概には「これが強さだ！」とは言えないと思うんだ。例えばボクシングなら素の身体能力とかが物を言うし、盤上遊戯なら頭の回転がそのまま強さに繋がるよね。各々の分野で何が強いかは違うから、全体の中で共通する条件では無いけど」

「それでもやっぱり、最後は強かに在れた方に勝利の女神は微笑むんじゃないかな」

彼女はそんな風に言葉を締めた。晴天を見据えるその眼差しに、少しだけ寂寥の念を感じたのは気のせいなのだろうか。何となく、彼女が、自分はそう在る事が出来なかつたと言っている様に思えた。しかして、何となく感覚は掴めた。後はより思考を明瞭にすれば相応の答えが分かるだろう。

暫しの逡巡の後、思い切って口火を切ってみる事にした。

「確かいつの時代かは忘れたけど、中国の昔の偉い人が、楽しんでる奴、その事柄が好きな奴、その事柄を知っている奴の順で優れていると言う風な事を言ってたと思うんですけど」

余りに拙い。中学で習うような格言であるが、それでも本質は高尚だと思いたい。ただ……ただ、心の奥底でこれでは無いだろうと言う疑念が、少なからずあった。

「それに従って考えるなら、『楽しさ』が一番大事なんじゃないかなって思います。」

私が喋っている間、彼女は朗らかに微笑みながら相も変わらず晴天をぼうつと眺めていた。

「……成程ね。確かに『何だかって楽しんだもんの勝ち』って言うよね。でも、勝敗を度外視して考えればそうかもしれないけど、今回のテーマはその競技の勝利に必要なものを考える、だからね。楽しさだけじゃ勝てはしないよ。それに」

そう言葉を切って彼女はこちらに顔を向けた。視線と視線がかち合う。彼女の澄んだ色の瞳に、何だか全てを見透かされているようで気味が悪かった。

「君はもっと、純粹になれる筈だよ」

彼女の醸し出す雰囲気は会長さんの威圧感と毛色こそ違うが、言い知らぬ妖艶さがあった。ただ超然とそこに在るのでも無く、知らぬ間に、気付かぬ内に、纏わり付きやがては呑み込む。この時、本当に奇っ怪であるのだが、答えをはぐらかして煙に巻こうとは少しも思わなかった。

「『悪辣』だろ。」

何を考えるまでも無く、自然と口を突いた。

「どんなに強かろうが関係ねえ。正道を踏んでルールに徹する必要なんざ欠片もねえ。番外戦術、ブラフ、トラツシユトーク。どれもこれもやる時に相手の心配なんて必要ねえからな。同じ土俵にいる以上、勝者になるのは自分かそれ以外だ。それなら相手だつて相応の覚悟で臨むだろ」

彼女は私の弁を、依然此方を見据えたまま黙って聞いていた。口を喋む気は無かった。喋れば喋るほどに自己という存在の肯定になる気がした。

「どれほど強くたつて、最後の一瞬にとどめを躊躇えば意味が無え。どんなに賢しくたつて、僅かでも倫理に思考を邪魔をされたならそれで終わりだ。競い合う楽しさも、夢を追う尊さも、語る奴ほど非情になれねえで負けてくんだろ」

やがて、喋り終えた私はふと、今まで自分の目の焦点があつていなかった事に気づいた。恥ずかしい話だ。あろうことか弁論に熱を上げるなんて。思わず口調が荒くなった事を詫びれば、彼女は気にするなと言ってくれた。

そしてそれと同時に、自分の言行の矛盾に気づいた。私は、つい最近完治したばかりの怪我の発端となったレースで、一切の情も躊躇いも無かったのにも関わらず勝ちを譲っている。そればかりか、楽しむ為にそのレースに出ていた。これでは全てがチグハグでは無いか。

何だか混乱しているようだ。己の思考と感情の整合性がまるで取れていない。初めて直面する異変に混乱していると、静かに彼女は口を開いた。

「そうだね、きつと君の言った事が一番正解に近いんだと思う。」

不意、であった。

「けど、一つ正すとすればそれは『悪辣』ではなくて『私の強さ』或いは『エゴイズム』と言い換えるけどね」

先の言葉に続けて目の前の女は言った。

「夢を追う。誰かの気持ちに応える。どんなに耳触りの良い言葉を並べたところで私達の飛び込んだ舞台は競走で、本質は闘争なんだ」

「……」

淡々と彼女は言葉を連ねた。しかし、“エゴイズム”か。ふむ……まあ確かにそうだろう。確か直訳で“独善”とかだよな。凡その意味として私のやっている事は間違いなくその言葉通りのモノだと言える。

まだ微かに混乱はしている。しかし、その原因を探り出すところの女の話とでは明らかに前者の方が時間がかかりそうなので、一先ずは後回しである。

「身も蓋もない話になってしまいうけど、争い事をする上で最も求められるのは才能だよな。これは揺るぎようが無い」

首肯する。

「ならば争い事に勝利する上で最も大事になるのはさ、如何に自分の才能を躊躇わずに発揮できるか、て事じゃないかな」

ム、なるほどそういう事か。……ン？私は何故、自分の発言の意図を自分で真面目に考察してるんだ？ひよつとして私って結構頭悪いのか？

「自分が勝つ上で、何が使えるのかは知っておいて損は無いよね」

「フィクションなら綺麗事並べた方が勝つけどさ、現実ってそうも行かない訳だし」

ああ……納得がいった。今のこいつの台詞で、何故私が本来勝ち得たはずの勝負を捨てたか分かった。いや、実際知ってみると何故だか不自然なくらいスッキリする。いやはや、こいつには礼を言わねばなるまい。変人の頼みにも付き合ってみるもんだ。

だがしかし、である。

「なあ、マジに気になるんだけどさ、あんたなんで初対面の私にそんな仲良いやつと話すような真面目っぽい話するんだ？」

これだけは知りたい。普通のやつなら初対面の奴と話すのにこんなトリッキーな話題を出す訳がない。こいつがただの変人の可能性

が高いが、一応そうでなかったら嫌なので確認をしておきたい。

そう思い問うてみれば、彼女は苦笑混じりに口頭で軽く謝罪したあと、こんな事を言った。

「実は伸び悩む若人に助言の一つでもしてやるかあ、ぐらいに思っ
て君に話しかけたんだ。まあ、話してみれば全然そんな事無かったみた
いだけだね」

ン？

「え？」

「ん？」

「いやあ……だってねえ。幾ら休日だからってトレセン学園の設備も
ろくずっぽ使わないで、こんな人気のないような寂れた運動場に来て
る娘がいたもんだからさ、てつきり何か悩み事があるのかと思うじや
んか」

まあ見え…なくもない。だけどさあ、何かこう、あるだろう。もう
ちよつと手緩く言っただけだった。

「それに、親しい友人とかより赤の他人の方が悩みとかは話しやすい
かなって」

「友達いねえんで分かんないす」

「え」

「親しい友人が居ないので分からないです」

「……………」

何だその目は。

「その、ごめん？」

喧しいわ。

彼女はその後、そろそろ時間だとか言っただけで適当に見切りをつけてど
こかに退散してしまった。

別に、あの後話さなかったかと言われればそんな事はなく、やたら
申し訳なさそうな面をした彼女に飲み物を奢ってもらったり他愛も
無い話をして時間を潰した。流石に空気が沈んでいたので幾らか冷

やかしをいれて茶化しておいたが、無闇矢鱈に人の事情に首を突っ込んじやあ、それは浅慮つてもんだらう。ただ、今回ばかりはそのお節介で良い事もあったのでとりあえずは丁重に礼を言っておいた。

そして彼女と別れてすぐ、私は緩やかにトレーニングを始めた。調子で言えば来た時よりも幾分良い感じで出来そうな心持ちであった。彼女との問答に端を発し、自分の矛盾に気づき、そして理解した。気分はいつになくスッキリしていた。

肩の辺りから入念にほぐし、肝心の脚は上半身の倍ほども時間をかけてストレッチをした。長らく動かしていなかったので節々が小気味良い音を響かせながら鳴る。こういう時の己の好調を実感できる瞬間は嫌いではない。

トラックに出て、まずは一周分駆け足程度に走っておいた。適当なフォームで跳ねるように脚を動かし、異常の有無を確認する。多少不恰好であるかもしれないが、こんな程度が一番分かりやすいのだ。

そして、逃げ、差し、先行、追い込みの脚質の順に四週分走る。特に順番とかにこだわりは無いのだが、気づけばこれで定着していた。時間がない時は一周を半分に割って二周だけで済ませるが、今回は平時と変わらずに走る事にした。

逃げが最初の理由は、ハイペースで最初から飛ばしておくことで、なまっちよろくなった身体を叩き起こすのが狙いである。

そしてこれは飽くまでもウォームアップの範疇。終わり次第に他のトレーニングに移るのだが、私はその特性上、何かとトレーニングの内容を常に考えながら練習するため、今行なっているウォームアップ以外は2回と続けてやった試しがない。しかも一度にうんと長考をするので、己を追い込むほどキツイトレーニングでも、連続してやる事が少ないのだ。

しかし、今回は少し訳が違う。今走りはしているものの、頭の中で考えているのは自分の考えと行動のことだった。

私は、知識として、勝利に必要なものを知っていたのに、先のレー

スでは感情の悦を優先した。果たしてそれは何故なのか。

私は今まで、レースを楽しめないから他で補おうとしたのだと思っただ。事実、それは間違っていないが果たしてそれだけかと問われれば答えは否である。

気持ち悪かったのだ。

勝ち負けを競うはずの世界での、あいつらの行いは私には理解し難かった。戦う以上は降さねばならない相手に、友情だの礼儀だの……何を求めているんだと思っただ。

何故そんな風な事を言っていて、夢や希望を語るのだ。仲良しごっこがしたいならこの学園になど来ないで地方でそれなりにやればいじやないか。ここに来て夢を語るのならそれを貫く為には騙し討ちも辞さないような覚悟であるべきだ。

汚いことを見たくない気持ちも、したくない気持ちも分かる。

ただ、綺麗事だけがさも全てであるかの様に動くあいつらは、私からすればひたすらに悍ましく見えた。

ただひたすらに、気持ち悪かったのだ。

だからだと思う。敢えて負けてみたのも、あいつらの走りを潰すのも、きつと心の奥底で同じ土俵に立っていると思いたくなかったのだ。

綺麗事しか言わない向う見ず共に、お前らは私の掌の上なんだぞって、嘲りたかったのだ。

心の何処かで見下していて、そんな奴らと対等に争うだなんて、と自尊心が私をアレらと勝ち負けを競わせるのを拒んだのだ。

全く馬鹿げた話があったものだ。

私の技術を磨くなら、これから先競争相手の心理を理解する事も必要になってくるだろう。にも関わらず、根本からそれを拒んでいてはこの先の私に向上などありはしない。

それだけではない。青臭い夢を語る輩を嘲弄するようなウマ娘が、自分のちよこぎいな矜持一つの為にこれからのレースでもし敗北を

喫すような事があらば笑いだ者では済まないだろう。

私はこの競技の頂点に座している訳では無い。未だ発展途上の分際で随分とつけあがった事を考えていたものだ。

この先、見下した輩共に土をつけられたくないのなら、もつと貪欲に、己にとつての恥すらも呑み込んでいかなければならないのだ。

幾ら走つたところで疲れるだけだ。叶うなら今すぐ横になりたい。しかし今はそれ以上に、あのウマ娘共に負けたくなかった。

何よりも、心が騒めくのだ。私と戦う時だけは、夢を追うような希望も持たせるな、と。

決して対等とは思わない。だが、獅子は兎を狩るのにも全霊を尽くすのだ。畜生にも出来る事を、私がしない道理は無い。

【幕間】あるウマ娘の想い

初めてその娘を見た時、同学年とは思えないほどに均整のとれた肢体に瞠目した。そして、何を見ても何も映さないその瞳に言い知れない恐怖心を抱いた。

そんな驚嘆と恐怖を抱いたのも束の間、彼女の走りを見た時に私の胸の内にあつた思いは、そっくりそのまま畏敬と尊敬の念に変わっていた。

その日は予定が空いていて、スペちゃんのレースをグラスと観に行つたんだ。キングは一日トレーニングがあつてエルは補習をしなきゃいけないって言つてたから、2人だけだけど、そういう事ならつて言つてスペちゃんのトレーナーさんが関係者席に通してくれた。

別に私はどこで観ても良かったんだけど同期の中では私達が一番注目されていて、何かトラブルが起きても良くないと言われれば、従わない理由が無かつた。そんなこんなで通された席で、グラスと今日のレースの話をした。

「今日のレース……スペちゃんは大丈夫でしょうか」

グラスはスペちゃんの事になると少し心配性になつてしまう嫌がある。しかし、グラスは日頃奔放なあの娘に振り回されているのだからそう思つてしまうのも仕方ない話ではある。

「どうだろうね。でもまあよっぽどの番狂わせが無い限りは、スペちゃん一強だと思ふよ」

特に身内だからといって臆盾をする事は無いが、事前に告知されていたら今回のレースの参加者を見る分ではよっぽどのイレギュラーが発生しない限り、スペちゃんが負ける可能性は極めて低い。

少なくとも、レースが始まるまではそう思つていた。しかし、その思いとは裏腹に、その日のレースが終わった後、私は自分が随分と狭い視界で物を見ていたのだと知つてしまった。

「……わお」

それを見たのは、レースも中盤に差し掛かろうという頃だった。空いた口が塞がらない。そんな風に例えてモノを言われる度にそんな訳があるかと心の内で思っていた。それがどうだ。私は今まさに、暫時は呼吸すら忘れて彼女のそれをただ呆然と眺めていた。

最初は何かの間違いだと思った。偶々、本当に偶々スぺちヤンとフォームが似ているだけだと思った。しかし彼女がほんの数10m前まで全く違うフォームで走っていたという事実が、私のその考えを否定した。

そんな事を考えている内に、彼女のそれは瞬く間にスぺちヤンのフォームと遜色無いレベルの物になり、やがては彼女のトレーナーが言っていたこれから直していく筈の悪癖すらも修正して、完全に自分のモノとしてしまった。

「すごい……」

私の右隣からは、グラスのそんな声が聞こえた。至極当然の反応と言えるのではないだろうか。その時間の大小に関わらず、今までに少しでもレースに本気で取り組んだことのあるウマ娘であれば、彼女が平然とやってのけた芸当がいかに常識を逸脱した物であるか否応無しに理解してしまう。

ただ真似をすれば良いだけでは無いか。そう言われればそのようなだが、言うは易く、行方は難しだ。具体的に説明するならば、レースというスポーツに於いてウマ娘とは人であり、フォームとは筆跡だ。今知り合った赤の他人が適当に文字を書くからそれを寸分違わずに模写して、尚且つ汚いところがあれば修正しなさい。

こんな事を言われて、果たしてそれを完遂できるか。答えは否である。欠点の修正だけであれば不可能では無いが、それに完璧に模写する事を条件としてつけられれば、途端に手が付けられなくなる。そもそも、修正するのにだって少なくない時間を要するだろう。

それを彼女は、走る際のフォームという常人では違いすらまともに

分からない物で、あろう事かレースの最中にやってのけた。もはや異常ですらある、と思った。

(とんでもない奴がいるなあ)

このまま行けば、スペちゃんは先頭を走る彼女の影すら踏む事なく敗北を喫するだろう。しかし、そんな事はきつとあの娘からすれば屁でも無い。いや、負けて何も思うところが無いという事は無いだろう。きつと泣く。それはもう大いに泣くだろう。だが、彼女の志は一度や二度の敗北で薄れてしまうほど虚弱なものなんかじゃない。寧ろ、曲がりなりにも自分の完成形を間近で見ることが出来たのだから、それを全て吸収して飛躍的に成長するかもしれない。

それに何より、私はスペちゃんに対してある種の嫉妬心さえ抱いた。自分自身と戦う。夢の中や空想の絵空事なんかではなく、時には晴天、時には曇天の天空の下で、ターフという戦場の上で他の誰でも無い己自身と雌雄を決する。一ウマ娘として、一つの夢を胸に秘めて生きる者として、こんなにも心揺すられる事は無い。私は、最近はめつきり感じなくなっていた昂揚という感情を抱き、身震いさえした。

そんな想いも束の間、彼女——デイズオブレストは、私達の思いも寄らない行動に出た。

『残りは50m、先頭はデイズオブレスト、2バ身離——おおっと？これはどうしたデイズオブレスト。見る見る内に失速していきます。何かトラブルでもあったんでしょようか。』

マジかよ、あの娘。

*

「ちよーい！ちよいちよい。どこ行くのさ」
「グラスさん、何をしでかす気？」

こんな時に、エルは補習ときた。

心底では、とうの昔に分かっていた事だ。それが血で血を洗う仁義なき鉄火場であろうと、弱肉強食が唯一絶対の法である競闘の世界だろうと、それが不義理であるならば、彼女にとつてその想いは何よりも正当なのだ。何よりも貫かなければならない信念なのだ。

自己満足でも、自己陶醉でも無い。一つの淀み無く誰かの為の怒りだから、彼女は心を曲げないのだ。

あの日、結局スペちゃんがそのまま一着で終わった。それだけならばまだ良いのだ。スペちゃんを真似た娘だつてそうは見えなかっただけで怪我をしていたのだろうし、例えどんな理由があろうとも勝敗が全てなのだから。

けど、それだけで終わらなかった。否、終われなかった。あのレースから2日後の朝方、校舎棟2階のいつも皆んなで談笑をしている小さな休憩室で静かにスペちゃんは泣いていた。偶々そこに来た私達に気がつく余裕すら彼女には無かった。

けれど、私達は知っていた。その瞬間を共に走つてすらいない者が何を宣つたつて意味は無いのだと。だからこそ、ただ黙っていた。だが、今思えばそれがいけなかった。ふと、気配に気づいたのだろう。スペちゃんがゆつくりと顔を上げた。そして、碌に取り繕う気力も無かったのか、はたまた私達にだけは本音を吐露してくれたのだろうか、半ば泣き笑いのような顔で、彼女は呟いた。

『私、勝つたのに……勝つたくせに傷ついたんです』

「ええ、分かっています。分かっていますとも。私達が息をしているのは我欲が為に飛び込んだ世界。『勝ち上がる』とは即ち私達もまた、誰かの夢を踏み碎き、それらを自分への賞賛に変えてきたという事。『勝つて傷つく』などというのは不徳の考えでしょう。』

グラスは振り向かない。あれからスペちゃんは平時と何ら変わりなく生活している。だが、体面を取り繕っているだけであろうというのは容易に察せられた。その証左に、彼女は昨日の練習からまるで何かに追い立てられているように切迫詰まった走りをしている。鬼気迫るだとか、熱が入っているとかではなくて、見ていて痛ましくなる

ような走りだった。

「ですが、私達が戦場としている場所は…… “レース” は、才無き者と天稟を持つ者が唯一対等に競う場所。誰かがゴールテープを切るその時まで、一もなく二もなく “ウマ娘” として在れる場所。」

何も言わない。私はこの娘の想いを諫めるだけの言葉を持ち合わせていない。キングだって、ここで口を挟むほど野暮ったくはない。「走る前は衆目の声で縛られ、走った後は結果の二文字がのしかかる。そんな状況で、走ってる時だけは何に縛られることも無い。勝利の美酒も、敗北の辛酸も、全ては後について回るもの」

「スペちゃん…… スペシャルウィークは、 “勝って傷ついた” んじゃない。 “傷つきながらも勝った” んです。こんな風に考える事こそ、異端だと唾棄されるでしょう。たかが無名のレースと言われるればそれまでです。だけど私は、先達が血に塗れ築き上げた土俵を、親友を虚仮にしたあのウマ娘を傍観するぐらいであれば “外道” と面罵され、路傍の礫をぶつけられた方がマシです」

ここまで怒っているのならば、何を言ったところでどれほどの楔にもなるまい。ならば、私達のすべき事は

「ならグラス、一つ約束して」

「ええ、私からも一つ」

「ネエ、スペちゃん」

あれから数日。やはりスペちゃんの纏う空気はどこか重く、澱んでいた。1人の親友として早急に何か改善しなければと思考を巡らせていたが、妙案が出ることはなく、気分転換も兼ねて何の気なしに5人で昼食を食べる事にした。そして、各々が席に着くと、ちよつと前から三日くらいウンコ出てなさそうな顔でうんうん唸っていたエルが口を開いた。

「何で最近そんなにへろへろなんデスカ？ スペちゃんらしく無いですネ」

「…………え」

「んぐふう!?」

上記の音は、私が頬張っていたミートボールが口腔内を脱出した時の音声である。マズい…………このプロレスマスク擬きは今まさに地雷を踏み抜いた。

「ていう力、誰を追いかけてるんデスカ? 最近なんかフォーム変わりましたヨネ」

「つ…………あはは、えつとね」

イマイチ歯切れの悪いまま、スペちゃんはポツポツと語り始めた。このまま行けば地獄みてえな空気のまま解散になってしまう。やるしかなくなったわけだ。期せずして賽が投げられた。ドギマギしていたところで何が変わるわけでもない。私は他の2人とアイコンタクトを取り、事の成り行きを見守る事にした。

「フムフム。つまりは一刻も速くそのフォームをモノにしたいと?」

「はい……………」

「ナルホド、合点がいきまじタ。だけどスペちゃん、このままじゃ一生そんな事出来ませんヨ?」

「……………へ?」

「そもそもフォームっていうのハ、自分がより速くなれるように練習して、自然と磨かれるモノなんでスヨ」

「そのウマ娘だつて、未来が見えるわけじゃ無いんですカラ飽くまで想像のスペちゃんのフォームだったんでシヨウネ」

「!」

「それに第一、フォームにスペちゃんが合わせるんじゃなくて、スペちゃんに合ったフォームを磨くべきなんでス」

徐々にスペちゃんの顔に光が戻っていく。

この時、奇しくもスペシャルウィークとエルコンドルパサーを除く3人の思考は一致していた。

(エ、エルがまともなアドバイスをしている……………だど?)

「全部真似っこする必要なんてありませんヨ! アくまでその娘のは参考程度にしテ、その娘の度肝を抜いちやうくらいのすつごい走りを見

せてやりまシヨウ！」

「わ、私に出来るかな」

「ダイジヨブですヨー！いざとなったら私たちがいますからね！」

彼女はそう言ったあと正月元旦の朝に新しいパンツを履いたような清々しい顔で食べ掛けたご飯を食べ始めた。

本日のmvpは間違いなくエルだ。そして、後は任せろ。

「エルの言う通りよスペちゃん。私達はこういう時こそ頼りあうべきよ」

グラスがすかさずそう切り出した。

「グラスちゃん……!!？」

「ええ。一流の友人として出来得る限りの助力を約束するわ」

キングが間髪入れずに続けた。

「キングさん……!!？」

「釣り行かん？」

「処刑よスカイ。表に出なさい」

そんな風なやりとりをしている内に、いつの間にかエルも加わって皆んなで久しぶりに騒いだ。そうして燥いで、疲れて、解散する頃にはさつきまでの緊迫感が嘘の様に和やかだった。

これから何があったって、多分大丈夫だ。とそう思った。

期待

私だって、走る事以外は人並みの感性だ。レース外では真つ当に生きていく筈だ。

はて、秋のお天道というのはイマイチ覚束ないもので、雨降りに鬱々としていれば、いつの間にか穏やかに雲が揺蕩う……、と言った風な、移ろいの目紛しい事この上無しというものである。

今し方、胸に抱いた憂鬱だか悔恨だか混ざり合ったこの思いもまた、丁度そんな風な揺れ方をしているところであった。せつかくの善行なのだからもつとハッピーに居たいのに。

——数十分前。

表すとしてまず何と云うのが適当なのだろうか。白髪混じりの、初老と云うのは些か憚られる……如何にも人好きのしそうな柔和な顔。言葉にするとして、丁度そんな様な見てくれの婆さんであった。

常であれば無くなる前に買い足しておくワサビを切らしていた為に、もうじき日も暮れ始めようかという時分に、最寄りのコンビニに向かったのだ。

遭遇したのはそんな些事の帰り道である。大層な荷物を背負った婆さんが、丁字状になった住宅街の一角を、右往左往していた。

ここでそのままスルーするのも良いのだが、取り立てて急ぐ用事があつた訳でも無かつたので、ちよつぴりの親切心と暇潰しを兼ねて声を掛けたのだ。

「バーサン大丈夫？」

話を聞いてみれば、何でも初孫が産まれたという息子夫婦を訪ねて田舎から出てきたらしいのだが、あんまり同じような形の家が並んでるもんだからいつの間にか迷子になってしまったというのだ。

そんなこんなしている内に、いつの間にか日まで暮れ始めていたの

だという。

因みに携帯か何か持っていないかと聞けば、自宅に黒電話があるのみで、他は何も無いそう。ハイカラな物にはてんで疎いのだ、と気恥ずかしそうに言っていた。

何ともありがちな、微笑ましい話である。今回は少し危ないけども。

「いやあ、老いぼれが無理はするもんじゃないねえ……」

まあ、明らかにヨボヨボいう訳では無い様な風体ではあるし、話す雰囲気はとても明朗だ。息子夫婦は婆さん一人に随分と無茶をさせるものだとも思ったが、恐らくは婆さんが、元気な姿を見せたいとかで少し張り切ったんだろう。

「あははは！そんな事ねえさ。私もどれがどれだか分かりやしねえし！」

一番重い風呂敷を婆さんからひったくり、これまた婆さんが持っていた簡素な地図の様な物を頼りに、私はいそいそと道案内をすることにした。

地図という物をあまり見慣れなかったもので、見方を定めるのに四苦八苦したが、やがて大体の検討がつき、のそのそと歩き始めた時、婆さんが徐に口を開いた。

「こう見ると、今も昔も、貴女達は良い子ばかりだねえ……」

「どったのさ、いきなり」

そうすると、婆さんは思い出をなぞるように少しずつ話し始めた。

「昔ねえ、貴女と同じように助けてくれた娘がいたのさ。初めてこの町に来た時、貴女がしてくれたみたいに、とっても良くしてくれてねえ……」

「それつきり、すっかりその娘のふあんになっちゃってねえ。その娘を応援したくてね、初めて会場に行つて競バを見たんだよ」

ふーん。何ともまあ、健気な事で。しかし、あれだ。年寄りの話は当たり外れが大きいから、出来ればこっちから話題を振りたかったんだが。

「でも結局、その日はその娘負けちゃってねえ……お婆ちゃんは、あん

「まりお金が無かったからねえ、それつきりだよ」

ム。まあ、どこにでもありそうな話だな。いつの時代だかは知らないが、察するにこの人が若い時なのだろう。中々苦勞を重ねてきたのだろうと言う事は察せられる。

「はええ。そつからはレースとかみてねえんだ？」

「そうさねえ……お婆ちゃんが知ってるのは、その娘と、シンザンくらいのもんだねえ。」

昭和かて。いや、そうなのか。

ていうか、全く関係無いレースを見ただけのバーサンでも知ってるって、シンザンてやつば凄いな。

「シンザンやばかった？」

「あんまり世間様の流行りを知らなかったお婆ちゃんでも、名前だけは覚えてるからねえ。」

シンザン……。1960年代といえば、恐らく戦後の日本に於いて最も苛烈な熱を持った時代。その激動も呑み込んで、神と讃えられたのだ。

早い話がマイケル・ジョーダンみたいなもんか。

「バーサンの好きな奴の名前教えてよ」

「アーチライターっていう娘だよ」

ふむ……。ん……。ああ、思い出した。

アーチライター。言ってしまうえばそこまで強いわけではない。

G2を計5勝し、日本ダービーを始めとした最前線の舞台では、一着こそ獲った事は無いものの最高三着、掲示板入りは四回している。知略を擁した走りが持ち味で、脚質は差し。

レース開始から中盤に差し掛かるまでは脚を溜め、そこから緩やかに加速していく。その際、周囲のウマ娘とこいつはよく駆け引きをするのだが、それがまた巧いのだ。

ゲートの開く直前に騙りを入れ出鼻を挫き、そこから中盤までは周囲に動揺を誘う牽制、……。惜しむらくはその脚質でありながら、パワーに恵まれなかった事と、掛かりやすさだ。

優位であれば冷静だが、少しでも劣勢になると途端に瓦解する。アーチライターはそれが特に顕著だった。

更には、上澄みの上澄みであるスター級の奴らは、そういう戦法にそう簡単に嵌るような精神力では無いので、それらの要素もまた、彼女が勝ちきれない理由であった。

そういう訳があつてここぞという場面では、そこを突かれ容易く沈んでいた。しかしファンには寛容であつたようで、引退は惜しまれていたらしい。知る人ぞ知る名ウマ娘といった感じだ。

「お、もうすぐだぞバーサン」

のんびんだらりと話していると、いつの間にか目的の場所に近づいていた。もう少し時間の掛かるものだと思つたが案外そんな事は無かつたのに少し驚きである。

道中、バーサンが恵んでくれたドロップ缶の菓子を舌で転がしながら、このババアとの交流がもうじき終わるのに、ちよっぴり寂しさを抱いていた。

話は変わるが、この道順を迷うつて、バーサン方向音痴なんだな。

「ありがとうねえ。ああ、そういえば」

思い出したように婆さんは言った。

「ン?」

「いつだったかねえ、息子がお祝いに、競バを観に行くらしいんだけどね、もし貴女が出てたら、お婆ちゃん応援するわあ。だから、名前を教えてくださいませんか?」

ふはははは。このババア、何を言い出すかと思えば。

「嗚れた老いぼれのちんけな声援なんざ毛程も要らぬわ。故に名乗る必要も無し!」

「……デイズオブレスト。デイズって呼んでよ。もし出ても、観てくれるだけで良いからね?」

万が一に、老体に無茶はさせたくないのだ。

「デイズちゃん、可愛い名前だねえ」

「何のレース観に行くのか教えてよ。一応、もし出たらバーサンの事探すからさ」

「確か……3月頃の……何だったかねえ……」

3月？ワンチャン来たかこれ。私が出るレースだと良いんだが。

まあ、もし来てくれるなら丁度いいか。ファンサービスを試してみるのも、偶になら吝かではない。

「ああーお母さん!!？」

あれやこれやと思案に耽っていると、そんな声が前方から聞こえてきた。

「ム。」

見れば、少し利発そうな眼差しの女が此方に手を振っていた。何やら幾分走り回っていたようで、少しだけ汗ばんでいる。

「じゃあまあ、バーサン。今度は気いつけてけよ？」

「おやまあ、もう行っちゃうのかい？良かったら何かお礼をさせておくれよ」

「あははは！好きでやったんだから大丈夫だよ。それに飴も貰ったし」

そう言ってみれば、バーサンは少し申し訳なさそうな顔になってしまった。やめてろよな。せっかくのお人好しも、そんな顔をされたら意味がない。というか、そんな顔でいられると後味が悪い。

「その代わり、レースで見かけたらさ、心の中で頑張れーって応援してよ。私、頑張っちゃうからさ。」

嘘である。別にバーサンが居てもいなくても、普通に頑張る。

「もちろんさあ。お婆ちゃん、デイズちゃんの大ふぁんに、なっちゃったからねえ」

まあ、バーサンが居たら、やる気がほんのちよびつとだけ上がるかもしれない。

ハナ差勝ちが、5バ身差くらいになる程度の変化である。

そんな会話をしてしばらく後、バーサンと別れて私は帰路についてた。

薄々勘づいているかもしれないが、実は私は、お年寄りにあまり強い物言いができないのである。

まあ、健全で道徳を学んだ一般びーぷるなら、至極真つ当な事では

あるが。

少し歩いたところで、流し目程度に振り返ってみれば、安堵と心配を半々にしたような顔で、バーサンと若い女が何やら話している。見れば分かるものだ。きっと、仲睦まじい関係をあの家族は築いているんだらう。

『……んで………言えば………』

『分か………だけ………』

「ム。」

ああいう雰囲気は、やはり何処か苦々しく見てしまう。あまり直そうと思った事は無いが、それでもやはり、嫌になる。

因みに、門限を過ぎての帰宅だった為、寮長に大変ありがたいお言葉をいただいた。

——しばらくして。

「グラスワンダーってこのクラス？」

季節も少しずつ変化の様相を見せ、寒さに歯を震わせながらも私に向かったのは教室棟の3階である。この学び舎は如何せん生徒の頭数が多いので、この他にもただっ広い敷地の中に様々な施設があるのだが、人っ子一人居ないというような場所は全く無いのだ。

何が言いたいかというと、考え無しに探し回っていたところでも間違いなく見つからないのだ。

「あ、はい。そうですね………」

つまり、今私が名前も知らない生徒さんに怯えられているのも、決して無駄な損害ではないのである。

「要件は、レースの事ですか？」

そんな声が背後から聞こえた。

「ンーいいね。物分かりが早くて」

振り返りながらもそう言えば、中々どうして小憎たらしい澄まし顔が目映った。

「勝負には、乗ってくれるって事で良いんだろ？」

「ええ。いつであろうとも貴女を退けてみせます」

悪くない。どっちかと言えば、スペシャルウィークみたいの方が昂るのだが、こういう手合いも新鮮だ。寧ろ、こいつの方がなまじ心が強い分、好ましく思う。

「臯月の前座がよ、3月にあるらしいんだわ」

そう言うと、眉を微かに八の字に曲げ、グラスワンダーは言った。

「……………本来であれば、レースを個人の勝負事などには使うべきでは無いのですが、ここは貴女に合わせましょう」

「悪いいな。ありがとね」

さて、これ以後はシバくだけか。中々どうして心が躍る。やっぱり癖になってしまうような感覚があるものだ。

……………あのバーサン来てくれんのかな

異常性

「グラスワンダー」……、人格は正に誠実そのものだ。実直というか、一般の観点からすれば、こいつと仲良くなりたいたい、って思わせる様な人当たりだ。しかし反面、勝負事に於いてはまだ甘さが若干残る。何かの起点、或いはそこまでおおげさで無くとも良いから、キツカケさえあれば大いに厄介な敵となる。

「先行でいいのか？」

そう言つて共に研究に勤しんでいた我がトレーナーに声を掛けた。こいつは練習メニューに口を出さない分、知恵を絞る時に一緒に悩んでくれるから良い。

最近は今後の展望を考慮してレース前には必ず作戦を組み立てる取り決めをしたのだ。この先無策でいられるほど甘くは無いらしいのがトレーナーの見解である。因みに私の魂胆とかは上手くぼかして伝えているので、やり方について文句を言われる事はない。よしんばそれが露見したとしても、トレーナーは私を糾弾するような事はないだろう。だが、少し伝えるには心の準備が間に合っていない。

「そうだねえ、理由はあ？」

「一番無難だろ。お相手の才覚は青天井だからな。発展途上のイレギュラーは予測が出来ねえ」

「まあ、丸くはあるかなあ。ただよう、あんまり入れ込みすぎんのも良くないかなあ、後で見せるけどさあ、他の娘も大分強いよお」

流石にG1有数の大舞台の前哨戦ってだけある。この分ならグラスワンダーにばかり目をやっていると足を掬われるな。ただ、余程のメンタルが無ければ、如何に強豪と言えど模倣を目の当たりにして平素のままレースを運べるとは思えない……やはり念頭に置くべきはグラスワンダーだろう。あの精神性は、ともすれば私の技術を貫くだろう」という危惧がある、アレへの対策を軸に展開を思索するべきだ。

トレーナーが言うには、まだ所詮は未成熟の精神状態なのだから、

2・3度の揺さぶりを掛ければ沈むと思われる……とのことだ。

恐らくはそうに違いないが、かと言ってどんなに長くても5分掛からないレースの際中に、有効打と成り得るフォームを各々適切なポイントに挟み込むというのは至難だ。それ以外のアプローチも視野に入れるのが賢明だろう。まあもし、それらが困難な場合は少々不確定にはなるが、純粋な根比べも悪くは無い。

問題は手段である。今のところあいつの琴線が友人である事は把握しているが、それをどうにかこねくり回した案を考えようと思う。

「ねえ〜」

「あい?」

「頭疲れたからさあ、飯行こうぜえ」

まったくしよりの無い奴め。まだ談義を始めて2時間なのに、堪え性が無いっつらない。足繁く学園に通う生徒ですら毎日6時間くらいは机に向かっていてというのに。どうにもこれだからこのトレーナーは駄目なのだ。何が駄目かってこれが初めてで無いのだ。一昨日などは年頃の生娘であるこの私に、二郎系ラーメンとかいう代物を食わせた。おかげで次の日は歯磨きを入念にしたにも関わらずマスクをして生活せねばならなかった。それに加えて、いつも気紛れに物を摘まむから、最近はトレーニングの量を増やさなければならなくなってしまったのである。この間抜けめ。

「はあ……今日はなんだ」

「海鮮だぞお」

「行く」

して、レース当日である。因みにサーモン丼がとても美味かった。やはり鮮度が命である。また連れてつてくれないだろうか。あの後、作戦について考えてみたが、特に良い案は出なかった。やはりトレーナーのせいである。番外戦術を仕掛けようとも考えたが、アレの周りには私のやり口を知っている奴がいる。要らぬ事をして備えを堅牢にされては堪らないから、止むなく断念した。

だがやはり性分には合わない様で、どうにも何か言っておきたい気分である。

因みに会場については、スペシャルウィークとやった時よりも盛況のようである。まあ黄金世代と今回のレースのネームバリューを考えれば妥当であろうと思うが、それにしたってまだ薄ら寒いような時期によくここまで人が集まったなと思う。煩わしい。煩悶だ。

あと、これは最近気づいた事なのだが、グラスワンダーは同期の中でも人氣が著しく高い。大和撫子然とした佇まいと、生まれに違わぬ整った顔立ちに加え、レースになれば見る者全て（私を除く）を熱に巻く一気呵成のその姿勢。成程、端的に表すだけでも十二分に脅威が分かる。

さて、トレーナーと日程の打ち合わせをしながらも控室へと脚を運び、身支度を整える。何気に今までで一番の大舞台なのだが、私自身は酷く苛ついていた。……？イマイチ思考を把握し損ねる。調子は悪くないし、懸念点も気を揉むほど切羽詰まったものじゃない。ならば、何故ここまで胸焼けのような不快感を覚えているだろうか。

そんな事を思いながらのそのそと歩いていると、気付けば地下バ道まで来ていた。……何とかというか、掃除は行き届いているのだろうか、出口へ近づくとつれ、独特の臭気と湿気を感じるのが煩わしい。古惚けた汗と、ロマンチズムを絡めて言うのなら努力の結晶の成れの果てだろう。うざったいと思ったらありやしない。

「どうやら、臆す事はなかったようですね」

「みたいだな。私もびつくりだね」

「なんでそんな他人事みたいな反応なんですか」

聞き覚えのある声である。闘志……というよりは幾分か私情だろう。謂わば仇討ち目的で同意したのだから、こいつの言った論理は既に機能していない訳だ。

よく見てみれば、グラスワンダーの顔からは少しだけ陰が抜け、体格に関しては前見た時から今までの肉体面においての成長があまりに乏しい。

というのも、予測では今の状態のぎつと1.3倍程度に仕上げてく

るだろうと見積もっていた。この予測については、客観的な成長の度合いとこいつ自身の才覚を可能な限り検証して出したものなので、信頼に足るだけの根拠がある。

それに基づいて考えるならば、大方グラスワンダー自身も己が信念を曲げる様な事だと今回の一件で気づいたのだろう。そして自分の心と事実の矛盾に苦悩し、思うような練習が出来なかった。細部は知らないが大筋はこんな感じだろう。ありがたい話である。

ハッキリ言って拍子抜けだ。今回のレースはグラスワンダー、他の有望株、その他で脅威度の検討をつけていたが、こういう事になっていくなら別にグラスワンダーだけ特別扱いする必要はないな。

だけど何の用だろう。私は用があるけどこいつには私と話すだけの要件はない筈だ。

「で、何の用か聞いていい？」

「……あれから、少し考えを改めました。ですが、一つ聞いておきたい事があります。貴女は、害意のみを抱えて走っているのですか？」

「……さあ？」

何故だかは知らない。理由すら浮かんでこないが、以前と打って変わって、こいつの顔を見てみると不快感が強まるのを感じる。いや、つい数秒前まではそんな事なかった。とどのつまり、こいつの纏う雰囲気、この瞬間に変わったのだ。

「私達に夢を見てくれる誰かが居て初めて、私達は勝負ができるのです」

「……で？」

「如何に露悪的にしようとも、それが貴女の信念であるなら否定はしません。ですが、貴女にも、貴女の背中にも期待を寄せる人がいます」

「……………」

「ライブルに情を移さないのなら、せめて、未来に於いて貴女のファンであった事を誇りに思う誰かの事を、気にしてあげてください」

そう言って、朗らかに、慈しむように、包み込むように、

憐れむように、グラスワンダーは笑った。

ああ、分かった。何で苛ついてたのか。言い分じゃない。こいつの言ってる事は紛れもなく正しい。レースってのもただ走るだけじゃない。愛想振り撒いて媚び諂って、兎に角大衆に受ける工夫をする。強くなればなる程、自由じゃいらなくなる仕組みだ。

で、だ。何でそうなるかって言やあ面白いからだ。ウマ娘からすれば走る事が、観客は見る事が、面白いからだ。面白くて、需要があるから人が集まる。

こいつは、こいつらは、前提ですらない常識で、面白いのが当たり前なんだ。それを基に思考して矜持やら何やらを創り上げたのだ。だから、食い違つて当たり前なんだ。

何が面白いんだ？

何に夢見てんだ？

幾ら努力しても、お前らと笑えねえよ。

幾ら望んでも、夢が分かんねえよ。

何で、私はこんなに醜くて、テメエそんなに綺麗なんだ？テメエらそんなに生き生きしてんだ？頭の出来が一個違っただけだろうがよ。頭叩きやあ私も笑えんのか？クソくだらねえかけっこ擬き見て、ギヤハギヤハ馬鹿みてえに燥げんのか？

違えよな。テメエら頭数が多いだけでよ、綺麗じゃねんだろ？
偶々似たような事考えた奴が多いだけでよ、全部がそうだと思いだ
みやがる。

母親も父親もそうだった。走る事が面白くねえのがそんなに変わ
？

走る事が面白く無くちやあ絶望しなきゃいけねえのか？

元々無えもんを失くしたみたいに扱いやがって。

悪いな歪だよ。大人しくしとけば良かったな。私は異常者ですつ
つってベそかいてれば良かったな。申し訳無さそうな顔しながら毎
日暮らしてれば良かったな。

そうしとけば誰も悲しくなかったもんな。糞みてえな唯一の趣味
もみつけなかったよな。誰かさんのポリシーも穢れなかったな。

「おい」

理由は、無い。もっと言うと、そんな眼で見られる、理由は無い。

「お前、轢き潰してやるからな」

お前ら、笑顔が瘤に障んだよ。

失敗？

時々、思う。

私にも、そういう未来はあったかとも
もしあったら、あったとするなら、

そんな愚物に産まれた事を、きつと後悔しただろう。

『3番人気——。脚部の不調から……』

下らない思考が大部分を占めていた脳内に、ガサついた音声が響いた。このアナウンスは、ある意味で死刑宣告のような、そんな陰惨な雰囲気を纏う。尤も、それは個人に問題がある訳で、アナウンス自体、特段に不備は無いのだが。

「はああ……」

状況を整理しよう。

怒りは、とてもシンプルな動力源だ。

頭に血が昇っている時は力が増すし、罪悪感とかがぼろっと抜け落ちて、その憤りの矛先に全ての思考が向く。

尤も、私が元から罪悪感を感じる気性であつたなら、今ここでここまで怒りを抱く事も無かつたのだろう。ありがちな話にはなるが、

欠点を自認をしているのと、それを他人に謗られるのでは、大分感受の仕方が変わる。故の怒りである。

あそこで、特に面罵されたなんて事はないが、グラスワンダーの、心根と言うほど深くないとところに、私に対する看過しようの無い嘲弄の感情があつたのは、もはや取り繕う必要もない。

ただ、勘違いしてはならないのは、それは己もまた然りという事だ。初めて自発的に模倣した時から、私がレースの最中に悪意を以って接さなかつたことはない。

因果応報、と言えばそれまでだが、頭が理解していても、心が追いつかないの。青臭い、と大人は冷やかすのかもしれないが、本人からすれば溜まったものではない。

しかし、今まで外道に近い行いをしてきた者が自分も同じ仕打ちを受けたからと言って、正面切つて憤るのは憚られる。

つまりは、今の私にはコンセプトが必要なのだ。この怒りを正当な物と捉えて、余す事なく撒き散らすだけの言い訳が欲しい。

グラスワンダーが気に入らない。それは、原因が分かつた今、正当な理由ではなくなつてしまった。かと言って、他の出場者に適当な因縁をつけるのは、ただの八つ当たりであるから論外である。

「おおい、デイズ」

「ム!!？」

時間は無い。かと言って1人では結論も出ない。そんな訳で、早歩きでせこせこ探し回っていた人物は、のんきな声で階段の上から顔を突き出していた。

「割り増しで怖い顔してさあ、どおしたんだよう」

「理由」

「あい？」

「私が頑張る理由を、よこせ」

「?、……!お前が負ければ私は悲しいぜえ」

「分かつた」

……いや、認めよう。どれだけ理屈を捏ねても、私は己が癖を侮蔑された事に腹を立てていて、尚且つ意趣返しをしようとしている。

つまりこれからの戦い、私はどうしようも無い悪徒である。しかし、それで言えば彼方もまた、『我が親愛なるトレーナーに無作法を働く悪徒』である。屁理屈と言えば屁理屈だし、なんなら暴論だが、納得できればそれで良いのだ。

……刹那の違和感。感じ入る間もないままに、ゲートへ入る。ここから先は、それ以外を考えれば即座に勝敗が決まる、一意専心の妙境だ。私以外のウマ娘は、楽しく、熱く、故に冷静に思考する。楽しいからこそより楽しく、より上へ。理由に他人を使い、継続にもまた他者を使う私と彼女らでは輝きに雲泥の差が生まれるのだろう。

しかしだからこそ、

『……………ガ』

眩めく輝きを奪うのは、こんなにも心躍る。

『チャン』

今の今まで、注力してスタートダッシュを鍛えた訳ではないが、初の踏み切りは最高標準である。言ってしまうえば当然で、模倣は依然発揮されている。会長さんの踏み込み、小分けした動作にあそこまで手間取ったのは久々だった。

癖がなく、流麗。単純に基礎を極めた強さの顕れ。数ヶ月そこらで至る筈も無い努力と研鑽の結晶を数日で奪う悦。スタートの好調に浸る間は僅か、しかしてその刹那に油断はない。見渡す、広く視野を持ち、視界の端から中央まで、視覚情報を広げる。

(……事前情報に摺り合わせよう。2人逃げのやつがいる。ペースメーカーになってもらおう、いや、見る分に内1人先行か、先行……グラスワンダーは先行のようだが最終盤に差し脚を残している可能性が高い)

戦うにしても、肝要なのは情報。レース中は瞬間的にしか確保できないそれを、紡ぎ、練り、プランへと反映する。

——ただそれは、敵方が拮抗した実力もしくは格上の時の話である。

横綱相撲という言葉がある。ざっくり言うとな敵の得意分野で戦つて勝つ事である。轢き潰す、なんて嘯いてみても、確固たる走りもこだわりの無い。と、くれば。

「やってみつか!!?」

バ群の中央で一息叫ぶ。そうすれば当然、散漫とは行かずとも僅かに此方へと視線が逸れる。なに、生物の本能的なものさ。コイツらに落ち度は無い。あとは何する訳でもなく、黄金世代を落としたネームバリューと今の奇行で、無意識のうちに私に目を遣つて、勝手に気を散らしてくれる。

それでいい。

お前らなんて、それくらいいい。

私は、実際のところ、今だつて凄まじい速度で成長している。身体的にも、勿論、技術的にも。だから分かる。いや、分かるようになってた。

世に、人に、その心に。文字通り、伝え説かれる神話の戦い。為すはああいう輩だろうと、あの、千紫の花より色づいた瞳を歪ませた時、心密かにそう思った。——唇が、思わず歪む。書いて字の如く、歪に、不恰好に。

ああ、そうさ。綺麗だ、目も眩む。堪らないぜ。だから真似っこをさせてもらうぜ、悪いな野武士女。てめーがマブと乳繰り合う予定のもの、ハジメテは貰つてくぜ。ああ、でもまあ

「遊んでくれよっ!グラスワンダー!!?」

競れるんならの話だけだな。

*

電光石火、と形容致す他ありません。あれほどのスタート技術、スベちゃんやんと戦つたあの日から今までの、この半端な期間で備えてきたというのだから、舌を巻かずにはいられない。ただ、賞賛はしても憧憬を抱かぬのが競争の常。あの程度、寧ろ、予見の内と呼ぶべきでしょう。

注力すべきはこの先、あの異常な技術力からするに、持ち得るスキル——実戦で十全に効力を成せるものは、十や二十では下らない。

しかしそれは、一度のレースで全て発揮できるわけではない。先頭での駆け引きは中団に入れば意味が無く、逆もまた然り。

つまりは、限られた策に絞って対応すれば、幾ら対面が不利でも勝機が潰える事はない。加えて、先の会話にて何やら気を損ねてしまつたご様子。本来ならば、いの一に謝意を伝えたい衝動に駆られますが、如何せん今はレースの最中。もし手を抜けば、それこそ土道不覚悟、許されざる傲慢。で、あるならば

(全霊を尽くすのみ)

そう思つた瞬間、まるで心が凪いだような、しかし一切闘志は翳らず、それどころか益々燃え盛るが如くに溢れてくる。

一人の友として、勝ちたい。一人のウマ娘として、勝ちたい。或いは、人よりも本能に近い者として、勝つてみたい。

断言できる、少なくとも、未来のことはいざ知らず、古今に於いてここまで一つの意志を抱いたことはない。そこまで思つて、違和感を覚えた。——何故、私はこんなにも清々しく思っているんだろう。相手は、相対するのは、決して看過できないような悪辣を抱くの。何故、心の底から敬意を表したいとすら、そう思うのだろう。深い没入感は、ますます深い影をつけていき、全く未知の境地へと、私を運んでいく。何故か、疲弊してきた頭の中でそう直感した。

そこまで考えた、その瞬間だった。

「遊ぼうぜっ！グラスワンダー!!?」

思わずして、耳がひくつく。中団のバ群の先頭、大別して見るのなら全体の先頭より少し下の辺り、先行策の上で、最も与し易いポジション。そこで、中盤の辺りから陣取つて様子を伺つていた私の、左後方。体感の上でならば、ともすれば接触してしまうのでは無いかという程の、超近距離。デイズオブレスト、彼女の声は劈いた。

「おおっと、すまねえ！水差した」

仮にもレース中に、なんと喧しいことか。まるで夕暮れの鳥——そんな喧騒とは打って変わって、依然、不可思議な没入感の心内にある。今の私は、その程度で集中力を切らさない。それどころか、彼女の姿が視界に入り、より明晰的に思考は冴える。

視界が、遅れる。いや、世界が遅い。

一步、北風が吹き荒んだかのように、全身が強張る。後、即脱力。
二歩、澄んだ視界の中で、脚が踏み飛ばす大地は、より震えるよう
になった。

三步、自分が走っている意識は消え、景色のみが、加速した。

これは——へ　　く

*

やば、ちよ、やばば。やばばのば。おうるるる。うつそでい。

話しかけてみても、眉の一つ顰めない。なんか気味悪いなあ、とか
思ってたなら、直後、どつかで聴いた様な音を置き土産に、グラスワ
ンダーがカツ飛んだ。流石のデジャヴに、正味ちよこつと舐めてた事を
後悔しつつ、禪を締め直すつもりで加速する。ある意味で、期待通り
で、予定調和とも言えなくないけれど、ある意味ではアテが外れたと
も……まあ、いいや。

確か、〃アイツ〃は……。丁度、終盤か。

煮崩れしたみたいな半端な体勢を整える。真つ先に重心を所定の
位置へ。ついで傾き加減と歩幅を想定し、算出する。最後に、最も適
した腕の振りをフォームに合わせ、完成だ。多分、二年後くらいのス
ペシャルウィークはこんな風だろう。

タツタツトンツ……——ズ、ドンツ！

如何に現役の才覚に富んだウマ娘でも、歩き方で誰か当てるなんて
芸当、そう出来るものではない。つまり、今一瞬、流し目で此方を見
遣った、件の野武士——グラスワンダーは己の世界へと闖入してきた
私を見て感じ取ったのだ。

親友が、競りに来た。

でなければ、あんな昂揚めいた顔をしないだろう。と、言えるほど、
彼女の表情は今、煌めいている。残すところは最終直線。トツプス
ピードは、無い。私のこれは特別性だ。徐々にギアを上げ、体力が尽
きない限り、一定の速度で加速し続ける。山猿の如く鍛えた私でさ
え、諸刃の剣以外にはなり得ない技。けれど、残りがこの程度であ
れば、何ら問題は無い。

悠々、でも無いが。顔が引き攣るほど全力を振り絞ったグラスワンダーを尻目に、いや、差で言うなら腰目くらいではあるが。私はゴールラインを踏み、徐行していく。

瞬間的に、ではあるが、グラスワンダーは本来格上とも呼べる、未来のスペシャルウィークを寸分違わず模した、しかも加速に特化させた私と、競り合ってみせた。それが何を意味するか。

彼方を見遣れば、悔しさを滲ませながら、しかしどこか爽やかな瞳で、一切の曇りもない眼のまま、グラスワンダーが歩み寄ってきていた。

「僅差圧勝、ですね」

「……チツ、謙遜は好きじゃねえよ」

そんな軽口のあと、少し上擦った声で、グラスワンダーは此方を見据えながら言った。

「どうか、もう一度。私と競走しましょう。何としても、勝ってみせます」

「やあだよ。もう一度なんて」

顔に影を落としたグラスワンダーに、少し決まりが悪いのでそっぽを向いて呟く。

「あと十回はしばいてやる」

布石は打てたし、このくらいで今日のところは許してやるよ。私は気長に待てるタイプなんだ。